

共同住宅建設に伴う

宮ノ下遺跡第 11 次発掘調査報告書

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が実施した共同住宅建設に伴う宮ノ下遺跡第11次発掘調査の報告書である。
2. 本調査はユニバース土地開発株式会社(代表取締役・志井廣明氏)から依頼を受け、東大阪市長堂1丁目74-1他11筆で、1999年11月1日～2000年1月17日まで現地調査を実施した。
3. 現地調査および整理作業にかかる費用はユニバース土地開発株式会社が全額を負担した。
4. 本事業にかかる現地調査および本文の執筆は財団法人東大阪市文化財協会・別所秀高がこれを担当した。
5. 本書に掲載した水準高は東京湾中等潮位(T.P.)を、座標系は旧測地系の平面直角座標第VI系を基準にした。
6. 本書に収録できなかった現場写真や遺物写真、遺物データベース等を附録のCDに収めた。是非活用されたい。
7. 現地調査にあたってはユニバース土地開発株式会社および株式会社森本組の関係者各位の御理解と御協力を賜った。当協会職員をはじめ、趙 哲済・小倉徹也両氏(財団法人大阪市文化財協会)、井上智博氏(財団法人大阪府文化財センター)、岡田清一氏(財団法人八尾市文化財調査研究会)からは現地で有益な御教示を得た。心より感謝いたします。また、現地調査および整理作業には以下の補助員が参加した(五十音順)。

木下恭彦 柴田由花子 杉本隆二 峰松麗子 山岡茂樹

目 次

第1章 はじめに 調査経過と調査方法	1
第2章 宮ノ下遺跡の既調査成果と周辺諸遺跡	2
第3章 層 序	5
第4章 遺 構	11
第5章 遺 物	19
第6章 まとめ	34
報告書抄録	35

第1章 はじめに 調査経過と調査方法

宮ノ下遺跡は大阪府東大阪市市長堂および足代新町の近鉄布施駅北側で楕円状に広がっていると考えられている(東大阪市教育委員会 1996)。今回、ユニバース土地開発株式会社によって東大阪市市長堂1丁目74-1他11筆(図1.1)で共同住宅建設工事が計画されたため、東大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ多数の弥生土器が見つかった。これを受け両者の協議にもとづき、開発地内の600m²を対象に財団法人東大阪市文化財協会が調査を実施することになった。

調査は東大阪市教育委員会の試掘調査で本体工事によって遺物包含層に影響がないと判断された地表下約2.3mを担当者立会のもとで重機によって掘削した(図1.2)。その後、調査範囲の外周沿いに連続土留め壁を、範囲内には本体建物の基礎杭を設置し、さらに調査範囲の西北部を覆鋼板で覆った。これらの工事を施した後、地表下約2.3～2.75m(標高0.3～-0.15m)を対象に人力掘削によって調査を実施した。なお、重機による掘削および後の人力掘削で出た残土はすべて場外搬出とした。これらの措置は、敷地内に作業スペースが確保できないことや調査中の安全に配慮したこと、調査による本体工事の遅延を最小限に留めるためのものである。

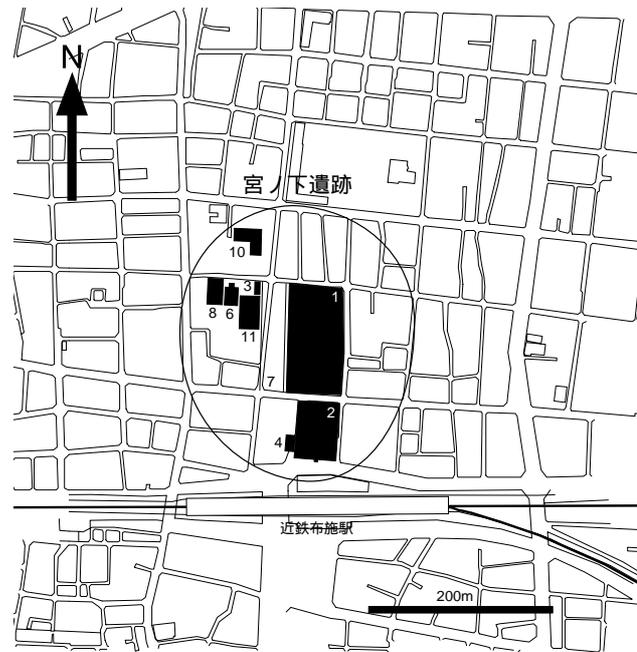


図1.1 宮ノ下遺跡の既調査地点。数字は調査次数を示す。



図1.2 機械掘削の様子



図1.3 調査地北側隣接ビルの屋上より調査地と布施駅のほうを臨む

第2章 宮ノ下遺跡の既調査成果と周辺諸遺跡

宮ノ下遺跡は1992年2月に、「ヴェルノール布施」の建設工事に先立って行われた試掘調査で発見された遺跡で、2002年8月までに財団法人東大阪市文化財協会によって計9回の本調査が実施されている(図1.1)。ヴェルノール布施建設予定地内で行われた第1次調査では、浅い埋没谷の中に形成された縄文時代晩期～弥生時代の貝塚が(別所1996a)、南側に隣接する「布施駅北口地下駐車場」建設工事に先行して行われた第2次調査では、埋没谷の続きや周辺の水を埋没谷へ排水するための溝などが見つかった(別所1996b)。第3次調査でも同様の溝と弥生時代中期の遺物を確認した(別所1999a)。第3次調査までは、より上位の層準で中世の遺物が散見されていたものの調査の対象にはならなかったが、第4次調査で古代・中世の遺物を含む堆積層がはじめて確認され、以降の調査ではこれらも対象に含まれることになった。また、貝塚が埋没していた浅い谷の続きがこの調査でも検出され、この谷は相対的な海水準の低下によって形成されたものであることが指摘された。これらの調査では、河内平野中央部における縄文時代～弥生時代の古環境変遷を明らかにするための様々なデータを得ることができた。

第6次調査では奈良～明治時代の水田跡や畑の耕作地跡、井路跡、鎌倉～室町時代の建物跡が検出され、堆積相の分布や土地条件図から調査地西方にかつての流路があり、自然堤防の上で集落が形成されていたことが推測されている(松田1997)。第6次調査地点より西側で行われた第7次調査では予想どおり、集落跡を想起させるような高密度で分布する平安～鎌倉時代のピットのほか、井戸、耕作地跡、井路跡が、東側隣接地の第8次調査(中西1998)でも同時期の井戸、耕作地跡、井路跡が検出されている(別所1999b)。また、第10次調査では鎌倉～室町時代の耕作地跡、江戸時代後期～明治時代初頭のかんがい水路跡などが見つかっている。これらのうち平安～鎌倉時代の集落跡や耕作地跡は、妙心寺文書の「後村上天皇綸旨案(正平5年7月11日)」、「北畠親房寄進状(同年12月5日)」、「河内国司庁宣(同年12月9日)」、「師守記(延文元年3月10日)」、「後円融天皇綸旨(康暦2年3月20日)」にみられる「足代庄」、「大乘院寺社雑事記(延徳3年9月16日・18日条)」にみられる「網代庄」(平凡社1986)の一画に比定される。なお、もとは字北町にあったとされ(布施市史編纂委員会1962)、現在足代1丁目にある足代地蔵尊には「永禄十年戊壬十月廿四日 河内國渋川郡足代庄」の銘があり、荘園制度の崩壊期に元の領主にとって代わった新興支配勢力に抵抗した在地農民の証であることがうかがわれる。

宮ノ下遺跡が位置する東大阪市西部域ではあまり遺跡が確認されておらず(図2.1)、調査事例も少ない。これは本地域が河内平野堆積盆の中央部に位置し、地下深くに遺跡が埋没しており、本来存在する遺跡を見つけにくかったためと思われる。しかしながら、1992年の宮ノ下遺跡の発見により、今後も東大阪市西部域で新たに遺跡が見つかる可能性があることが関係者に再認識された。とくに、旧大和川の分流が形成した自然堤防上には、古代以降の遺跡が埋没していることが予想される。

高井田遺跡は宮ノ下遺跡の北方1.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に下水道管理設工事で発見されて以来、布施市教育委員会、河内考古学研究会、東大阪市文化財協会によって3回の調査がおこなわれ、弥生時代前期～中期初頭の遺物・ピット・溝・杭列、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器・土師器などがみついている（布施市教育委員会1963, 原田1984）。このうち、第1次調査で出土した弥生時代前期～中期初頭の土器に、朝鮮系無文土器が含まれることが指摘されている（田代1985）。

西堤遺跡は宮ノ下遺跡の北東方2kmの自然堤防上に位置する。1968年に下水道管理設工事で発見された。これまでの調査では、5世紀末から6世紀の須恵器・土師器、ウシ・ウマの骨、平安時代の土師器、公朝十二銭の一つである「承和昌寶」などが出土した（下村1977）。

小若江遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3kmの自然堤防上に位置する。1940年に日本大学大阪専門学院（現近畿大学）構内で発見され、かつては「長瀬」遺跡と呼ばれていた。発見当時は調査がおこなわれなかったものの、工事中に地下3～7mで多数の遺物が採集された。採集された遺物には、弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器、同後期の須恵器・土師器や蓋形埴輪・円筒埴輪がある（布施市史編纂委員会1962）。近年になって近畿大学や東大阪市文化財協会によっても調査が実施されており、奈良・平安時代および中世の遺物や遺構が確認されている。

弥刀遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に市立弥刀小学校の校舎建築工事のさいに発見された（辻合ほか1964）。これまで

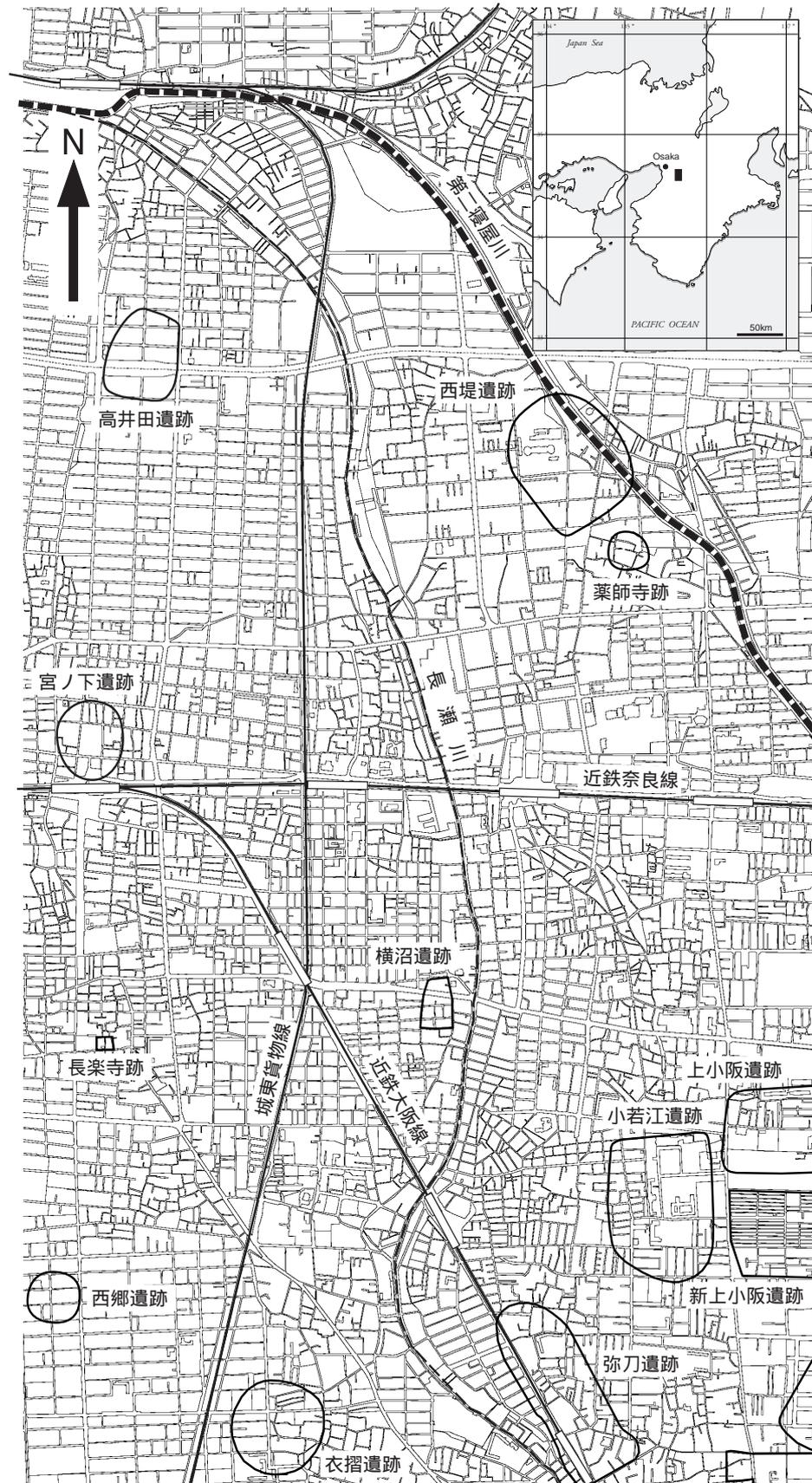


図2.1 東大阪市西部域の遺跡

東大阪市教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、東大阪市文化財協会などによって8回の調査がおこなわれ、古墳時代前期の土師器・ピット・土壙・井戸、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代～鎌倉時代の土師器・黒色土器・瓦器・建物跡・井戸・溝・土壙などが確認されている(下村1980・1992, 芋本1989, 原田1990, 別所2002)。また、近鉄大阪線沿いにある近鉄弥刀変電所内では、かつて奈良時代の人面墨書土器がみつかり、これは現在名古屋市立博物館が所蔵している。

文 献

- 芋本隆裕 1989 弥刀遺跡第5次発掘調査概報。「東大阪市文化財協会概報集 - 1988年度」, 東大阪市文化財協会。
- 下村晴文 1977 「村上学園校舎増築工事に伴う西堤遺跡調査概報」, 東大阪市教育委員会。
1980 弥刀遺跡発掘調査概報。「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 - 1980年度」, 東大阪市遺跡保護調査会。
1992 弥刀遺跡第7次発掘調査「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 - 平成3年度 - 」, 東大阪市教育委員会。
- 田代 弘 1985 畿内周辺部における「朝鮮系無文土器」の新例。森浩一編「同志社大学考古学シリーズII 考古学と移動・移住」, 225-233。
- 辻合喜代太郎・荻田昭次・浅田松次郎・桑原正明 1964 友井出土の須恵器と木片。「河内文化」11, 38-43。
- 中西克宏 1998 「宮ノ下遺跡第8次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会。
- 原田 修 1984 「高井田遺跡第2・3次調査報告」, 東大阪市文化財協会。
1990 弥刀遺跡第4次調査報告。「山賀遺跡発掘調査報告書 - 付弥刀・瓜生堂・縄手・若江遺跡発掘調査概要 - 」, 東大阪市教育委員会。
- 東大阪市教育委員会 1997 「東大阪市内埋蔵文化財包蔵地・指定文化財分布図」
- 別所秀高 1996a 層序及び遺跡形成過程。「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊, 東大阪市文化財協会, 7-26。
1996b 「布施駅北口駐車場整備及び寝屋川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書」, 東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会。
1999a 「ビル建設に伴う宮ノ下遺跡第3次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会。
1999b 「ビル建設工事に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書 東大阪市足代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷」, 東大阪市文化財協会。
2002 「老人ホーム建設に伴う弥刀遺跡第8次発掘調査概要報告書」, 東大阪市文化財協会。
- 布施市教育委員会 1963 「高井田遺跡調査報告」
- 布施市史編纂委員会編 1962 「布施市史」第1巻。
- 平凡社 1986 「日本歴史地名体系第28巻 大阪府の地名II」
- 松田順一郎 1997 「宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序 - 地下埋設管工事に伴う宮ノ下遺跡第7次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会。

第3章 層序

機会掘削時に観察した標高 1.0 ~ 0.4m 付近の堆積柱状図とより下位の断面図をそれぞれ図 3.1、3.3 に示す。調査地点の標高は 2.5m であるが、地表下 1.5 ~ 2.0m は既存建物の基礎によって地層が破壊されていた。

層序が観察できた最上部は標高 1.0m 付近で、層厚約 15cm の泥混じり粗粒砂からなる畑作土層がみられた。13世紀後半 ~ 14世紀前半の瓦器椀や土師器、6 ~ 8世紀頃の須恵器の破片、弥生土器などが出土したが、最も新しい時期の土器から判断して、13世紀後半 ~ 14世紀前半の畑作土層と考えられる。同時期の畑作土は隣接する第 7 次調査地点でも確認されている（松田 1997）。この作土は下位の砂層と泥が卓越する I ~ V 層を混合して作られたもので、調査で検出した EP3 や南壁断面でみられた土坑はこれらを地下から採取するために掘削された土砂取り穴である。

標高 0.6 ~ 0.9m はトラフ型斜交層理をなす細粒化 ~ 極粗粒砂からなる。下位の I 層の最上部から本層にかけて上方粗粒化サクセションを示し、洪水氾濫の示相堆積構造（伊勢屋 1982, 増田・伊勢屋 1985）の一種と考えられる。卓越する古流向は南西方向で、洪水氾濫によって調査地の西側を流れていた足代分流路（別所 1999）から運搬されてきたと推測される。出土遺物はまったくない。

I 層は下位より無層理で灰色の粘土質シルト（地層番号 6, 7, 以下「地層番号」を省略）、無層理で有機物を含む濃い灰色の粘土質シルト（5）、無層理で淡い灰色の粘土質シルト（4）の累重からなる（図 3.4）。静穏な後背湿地の堆積環境が推測される。本層は標高 0.4m 以上に分布するが、比較的大規模に掘削された DC4, 5, 6 の直上付近ではやや高度を減じる。4 と 5 の層界付近に

図 3.3 東壁断面。水系は標高 0m。

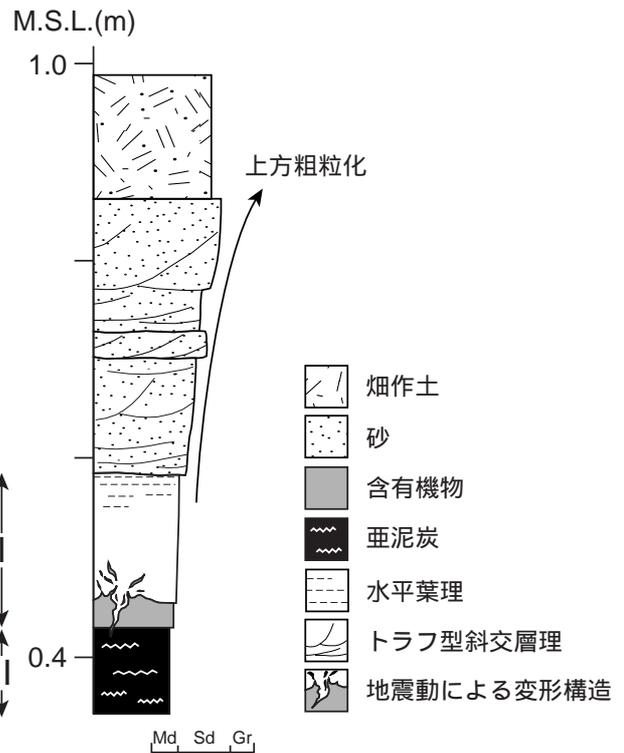


図 3.1 標高 1.0 ~ 0.4m 付近の堆積柱状図

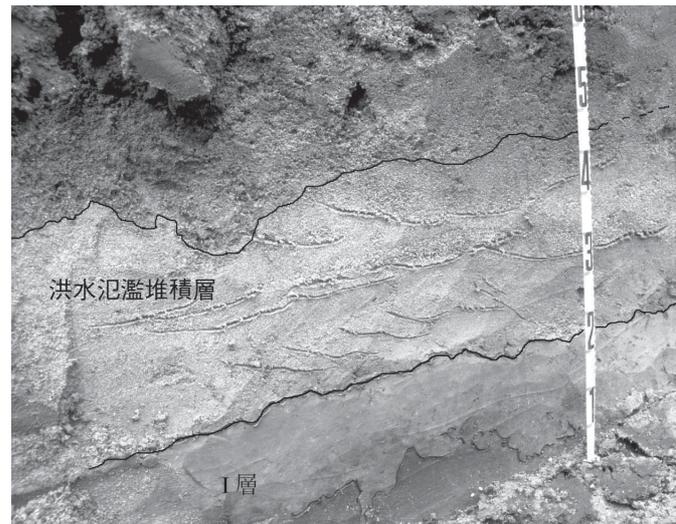
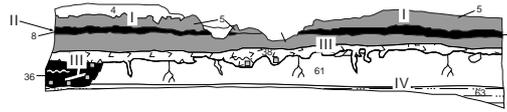
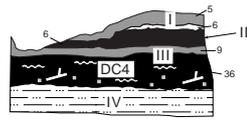


図 3.2 標高 0.6 ~ 0m 付近の断面



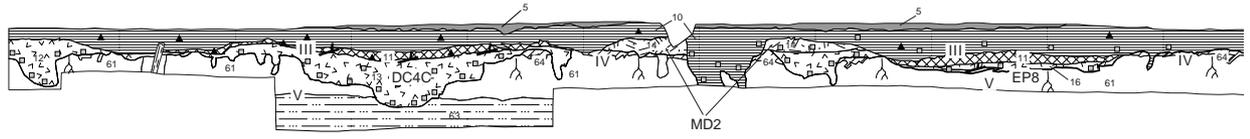
南壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

西 壁



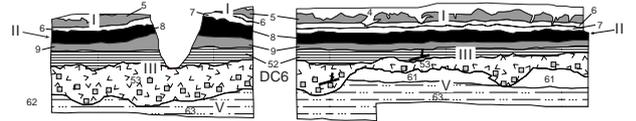
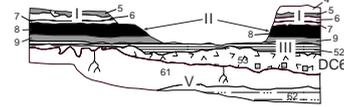
南壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

中央南北



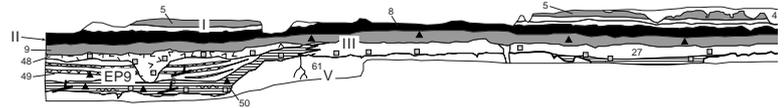
北壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—
-0.5—

東 壁



西壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

北 壁



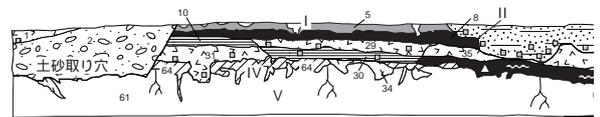
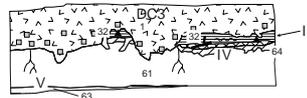
東壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

中央東西



東壁
M.S.L.(m)
0.5—
0—

南 壁



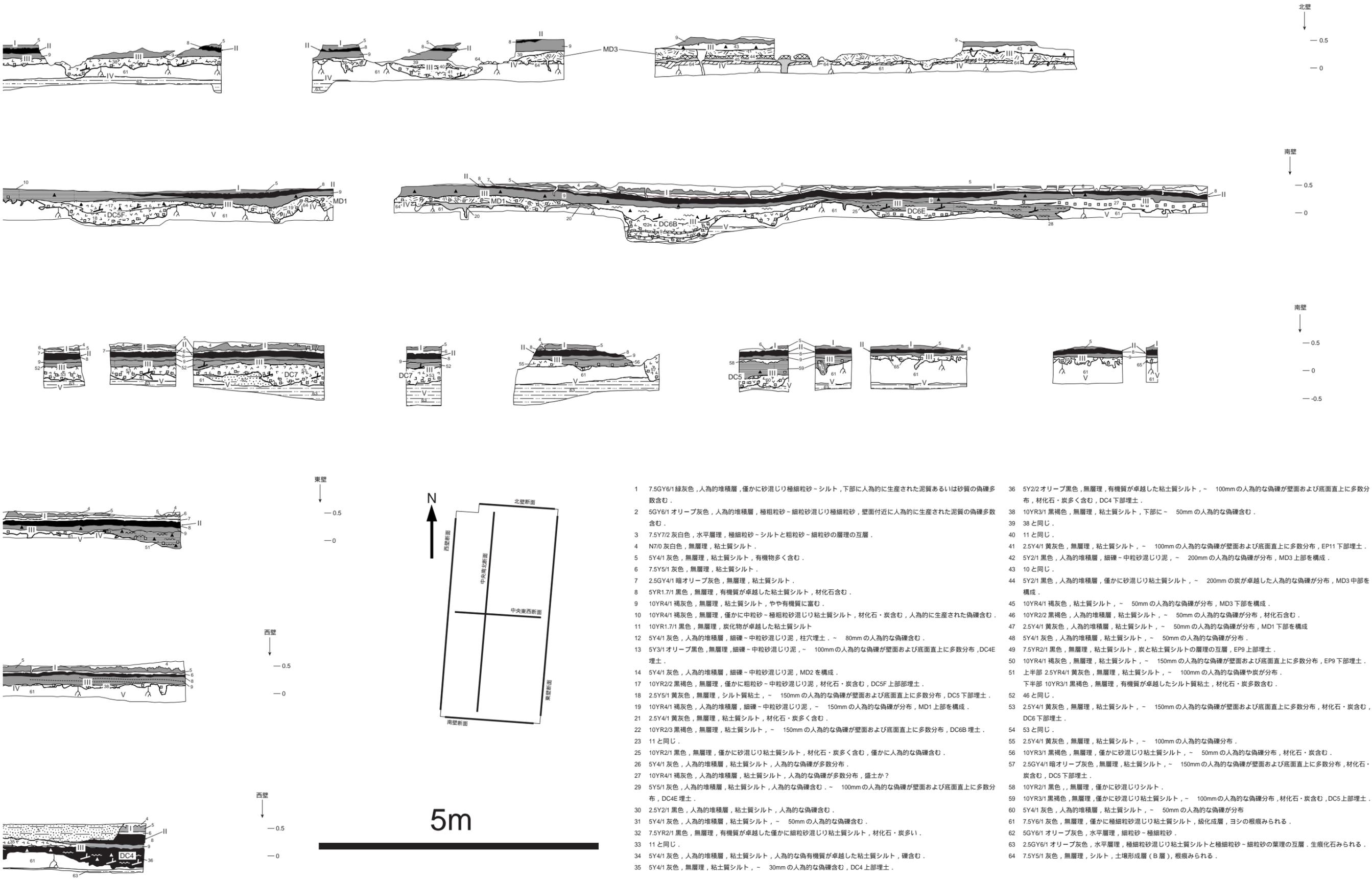


図3.4 宮ノ下遺跡第11次調査地点露頭断面

は地震動による変形構造があり、垂直断面では火炎構造が(図3.3)、水平断面では渦巻き状の模様(図3.6,7)が観察された。出土遺物はまったくなかったが、周辺の調査地点との対比から古墳時代中期～後期にかけて継続的に堆積したと考えられる。

II層は無層理で黒色の粘土質シルトからなる亜泥炭層。有機物が非常に卓越し、未分解の葉や根などの植物遺体がしばしばみられる(図3.3,5)。層厚約10cmで標高0.3m付近に分布する。水深が浅く、水の循環に乏しい後背湿地の堆積環境が推測される。弥生時代中期中葉(畿内第III様式期)の土器が出土したが、周辺の調査地点の同じ層準には畿内第IV様式期、第V様式期、古墳時代前期庄内期、同布留期の土器が含まれ、弥生時代中期中葉～古墳時代前期にかけて継続的に堆積したと考えられる。

III層はとくに溝や土坑などの規模が大きい遺構埋土の下半部(図3.9)、遺構掘削時に生じた残土からなる盛土(図3.8,10)、これらを覆う覆土(図3.9)に大別されるが、遺構埋土下半部と覆土とは必ずしも厳密に分別できていない。分布上限高度は標高0.3m付近で、下限高度は遺構の深さに支配されている。主として遺構埋土下半部から弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺物が多数出土した。

遺構埋土の下半部は灰色～濃い灰色を呈する粘土質シルトのマトリクスからなり、遺構掘削時に生産された偽礫や材化石、炭を非常に多く含む。とくにDC4やEP9の埋土は有機物に富む。マトリクス部が人為的な攪拌を受けた痕跡や遺構が埋め戻された痕跡は認められず、



図3.8 中央南北断面 .MD1付近 .細かくちぎれた白い泥が水平方向に並ぶところがMD1の盛土 .

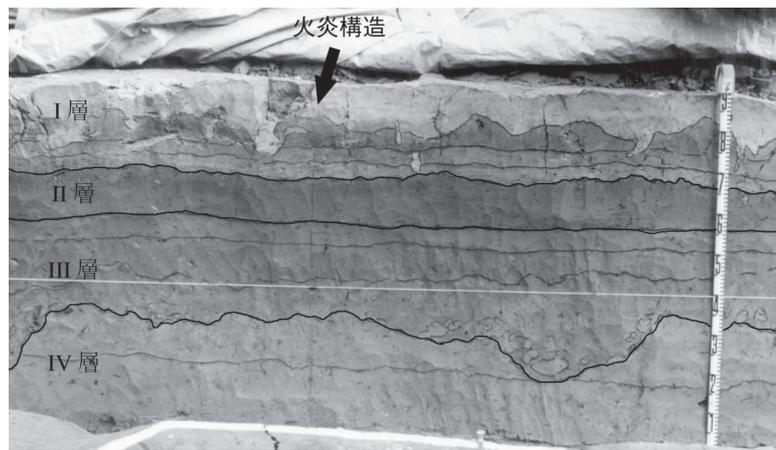


図3.5 東壁断面 地層最上部の薄い色の地層と濃い色の地層との境界が乱れ火炎構造をなしている .



図3.6 I層中の水平断面 .地震動によって泥質堆積物が渦を巻きながら変形した様子がわかる .



図3.7 II層上面の水平断面 .上位のI層が亀甲状に分布している .

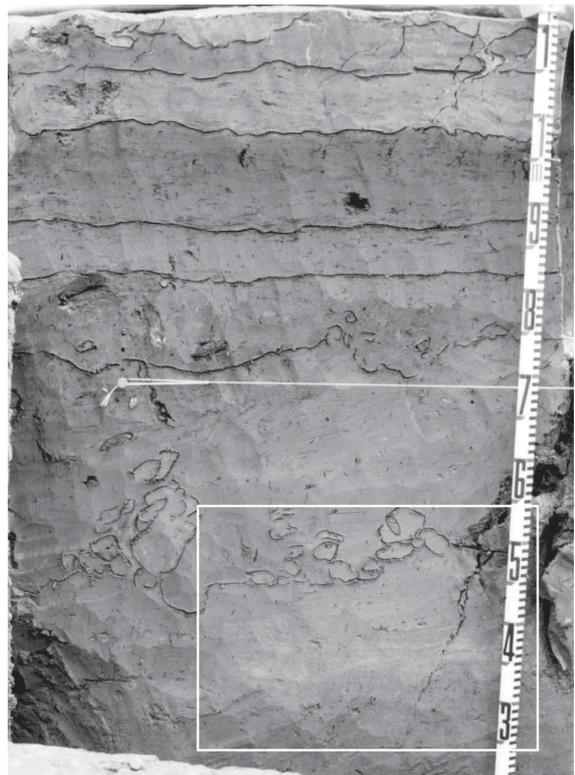


図3.9 西壁断面DC5付近 .枠内拡大写真は図3.11 .



図3.10 西壁断面6A区付近・MD3断面・比較的細かい人為的な偽礫が水平方向に分布し、人為的に積み重ねられている様子がわかる。盛土の母材はDC6を掘削した時の土砂と考えられる。

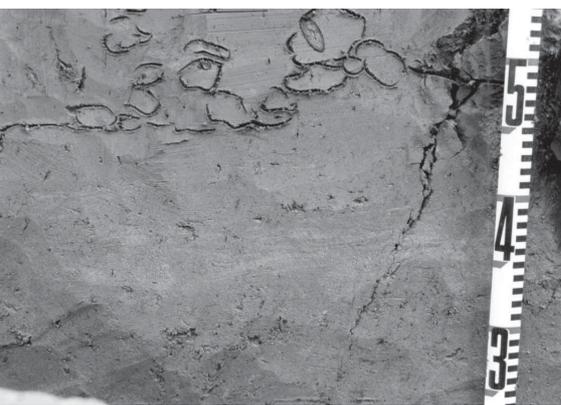


図3.11 西壁断面DC5下底～IV層付近の断面。DC5下底直上には人的に生産された偽礫が分布する。IV層には粘土質シルトと極細粒砂～細粒砂の葉理の互層がみられる。



図3.12 西壁断面4C付近のIV層(63)中でみられた生痕化石。

遺構内で湧出した地下水のもとで浮遊物質が沈積し、遺構を充填したと考えられる。

遺構掘削時に生じた残土からなる盛土は粘土質シルトの偽礫が積み重なって構成されている。水平面で盛土の分布を確認できたのはMD1のみであるが、垂直断面からは2A～2B区にかけてのDC5とDC4の間に分布するMD2、5A～6A区のDC6の西側から北側へかけて分布するMD3を確認した。

これらを覆う覆土は無層理の粘土質シルトで、とくに盛土付近では盛土上面からリワークした炭や盛土が浸食されてできた偽礫を含む。静穏な後背湿地の堆積環境が推測され、調査地点で初めて遺構が形成された時に比べて地下水位が著しく上昇し、居住には適さなくなったことがうかがえる。

IV層は極細粒砂混じり粘土質シルトと極細粒砂～細粒砂の葉理の互層(63, 図3.5, 11)と級化成層をなす僅かに極細粒砂が混じる粘土質シルト(61)の累重からなり、最上部には土壌形成が認められる。63には生痕化石が(図3.12)、61にはヨシの根痕がみられる。この累重については下限高度が標高2m付近にまで達し、4600～3300y.B.P.の海進堆積物であることを推測している(別所1999)。

文献

伊勢屋ふじこ 1982 茨城県, 桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因. 地理学評論, 55, 597-613.

別所秀高 1999 「ビル建設工事に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書 東大阪市足代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷」, 東大阪市文化財協会.

増田富士雄・伊勢屋ふじこ 1985 “逆グレーディング構造:” 自然堤防帯における氾濫源洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究報, 22・23, 108-116.

松田順一郎 1997 「宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序-地下埋設管工事に伴う宮ノ下遺跡第7次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会.



図4.5 弥生時代中期初頭の遺構、杭および柱分布図

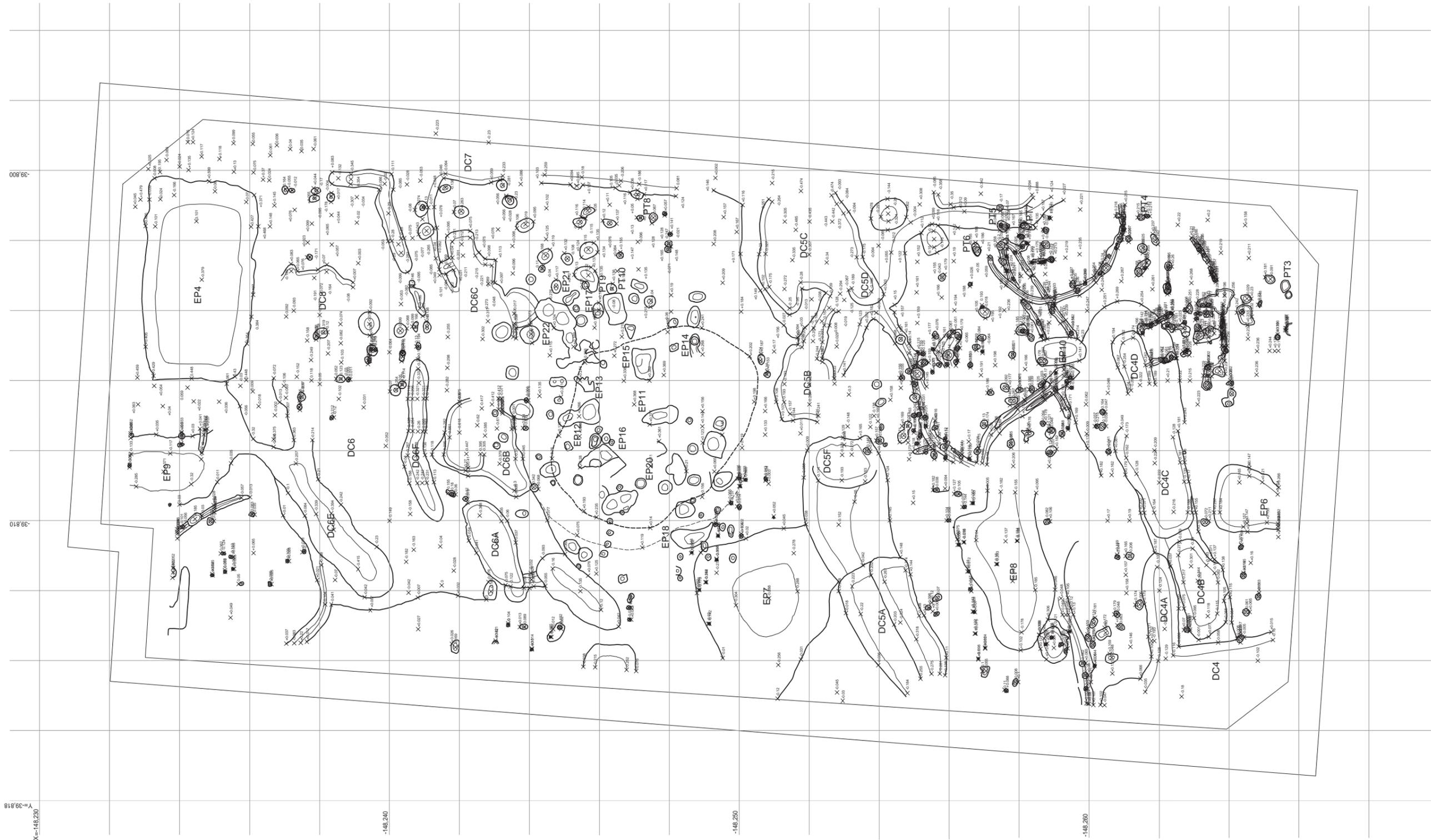


図4.6 弥生時代中期初頭の遺構面の標高

第4章 遺構

機械掘削深度の標高0.3m付近で古代以降の遺構を、より下位で弥生時代中期中葉、同初頭（畿内第II様式期）の遺構面を確認できた。後述するように弥生時代中期初頭の遺構群は当該時期の大規模な土地改変を挟んで前後2時期（弥生時代中期初頭第2面，同第1面）に細分される。

古代以降の遺構は調査の過程で偶然検出できたもので、遺構形成時の加工面や機能面、より後世の加工面ではなく、単なる調査作業上の検出面で認知できた遺構群である。古代以降の遺構には溝や土坑、土砂取り穴がある（図4.1）。EP1,5は楕円形、EP2,3は長方形の平面形状をもつ、いずれも出土遺物がない。EP4は隅丸長方形の305cm×574cm、深さ90cm以上の平面プランで、機械掘削時に上層でみられた畑作土を作るために掘削された土砂取り穴と考えられる（図4.2）。出土遺物のうちもっとも新しい土器型式から判断して13世紀後半～14世紀前半に併行する。EP4埋土は埋め戻された土砂からなるが、泥質の土塊を丁寧に貼りつけた泥層が挟まることから畑から地下への漏水を防ぐためのものと思われる（図4.4）。調査地南東隅で検出したDC1の埋土も埋め戻された土砂が顕著でEP4同様、土砂取り穴と考えられる。DC1は幅50～60cm、深さ20cm以上の溝で、調査地を東西に横切る（図4.3）。

弥生時代中期中葉の遺構は調査地南端で検出したEP6のみである。調査時は下位の遺構面と同一面で検出したが、出土土器に時期差がみられ下位の遺構面とは



図4.1 古代以降の遺構の分布 .北より撮影 .

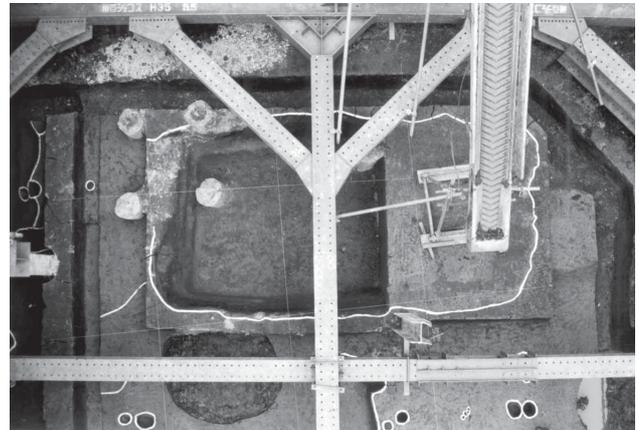


図4.2 EP4を半裁したところ .真上より撮影 .

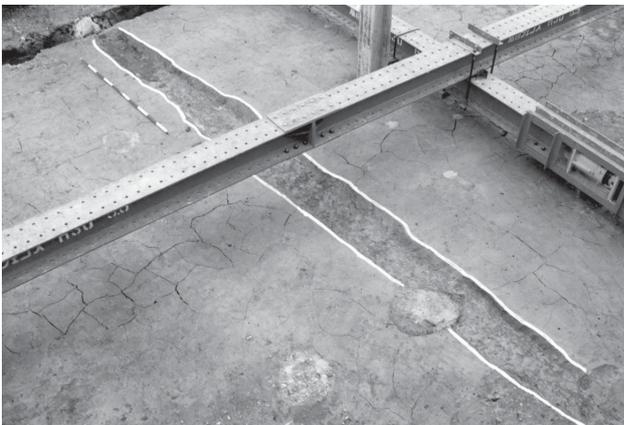


図4.3 DC1完掘状況 .東西方向にのびる .北西より撮影 .



図4.4 EP4埋土断面 .漏水を防ぐために埋土の中間付近に粘土が貼られている .

分別した。弥生時代中期初頭～中葉（畿内第Ⅱ～Ⅲ様式）の土器が出土し、Ⅱ層下面検出遺構と考えられる。

弥生時代中期初頭の遺構群は高密度で分布し、それらを上下2面に分別できると考えられる（図4.5,6,7,8,9）。弥生時代中期初頭第1面はDC4,5,6やEP7,8,9など比較的大規模に掘削された溝や土坑、これらの掘削残土で作られた盛土、さらに盛土上面に分布する柱穴群からなる。DC4は長形状の土坑が溝状に連なり、幅1～3m、深さ最大約70cmを測る。DC5は長形状～不定形の土坑が溝状に連なり、幅2～3m、深さ最大約60cmを測る。DC4および5はいずれも東北東～西南西方向に主軸をもつ。DC6は幅10m、長さ14m以上の不定形の浅い土坑であるが、その中には溝や土坑、柱穴が多数みられる。DC4～6からは弥生時代中期初頭の土器に伴って多数の材や加工木が出土した（図4.10,11,12）。これらの遺構の掘削残土で作られたのがMD1～3である。このうち平面で分布範囲を確認できたのはMD1のみであるが、MD1の盛土は部分的に埋没過程で流失している（図4.13）。MD1上面には直線上に並ぶ土坑群ないしは柱穴群、柱穴内で根元が保存された柱がある（図4.14,15,16,17）。このうち柱K15,21,22は柱穴底よりも下方へ食い込んだ状態が確認でき（図4.17）、これらの柱に伴う建物が沈下していたことがうかがえる。いっぽう、EP21,22には柱穴底に木片が敷きつめられ（図4.18,19）、EP13のK145は柱の根元が根絡み構造になっており（図4.20）、建物の

図4.7 弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式期）の遺構群。調査区東半部全景。北より撮影。

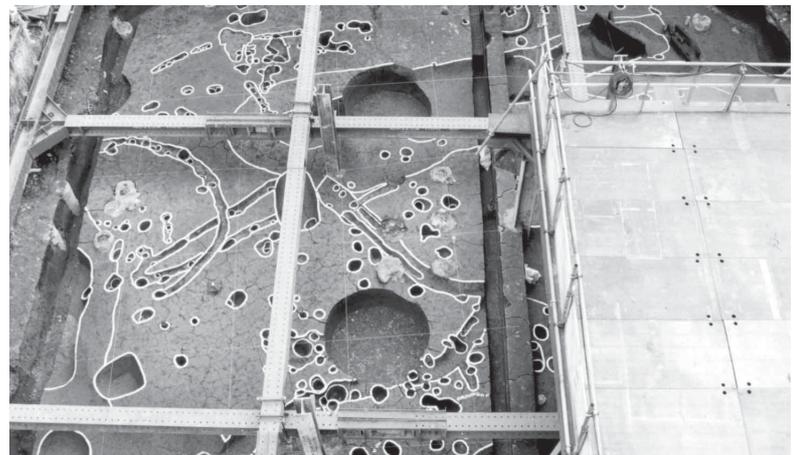
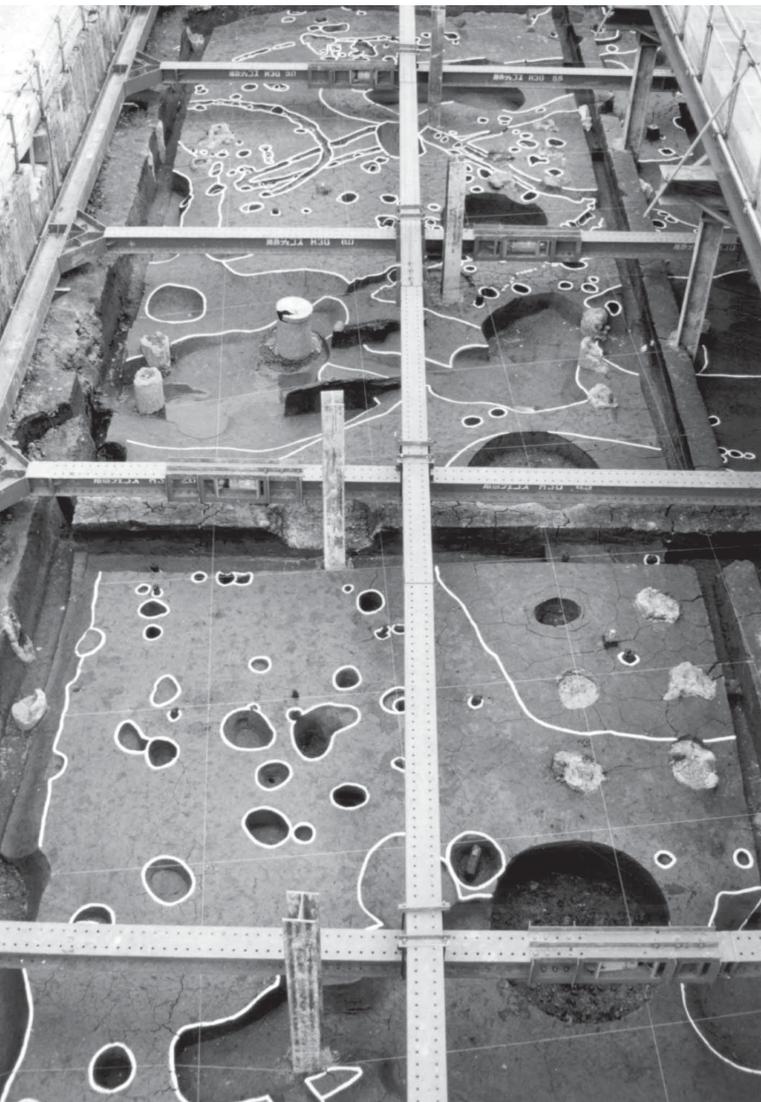


図4.8 弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式期）の遺構群。2B～1C区全景。北より撮影。

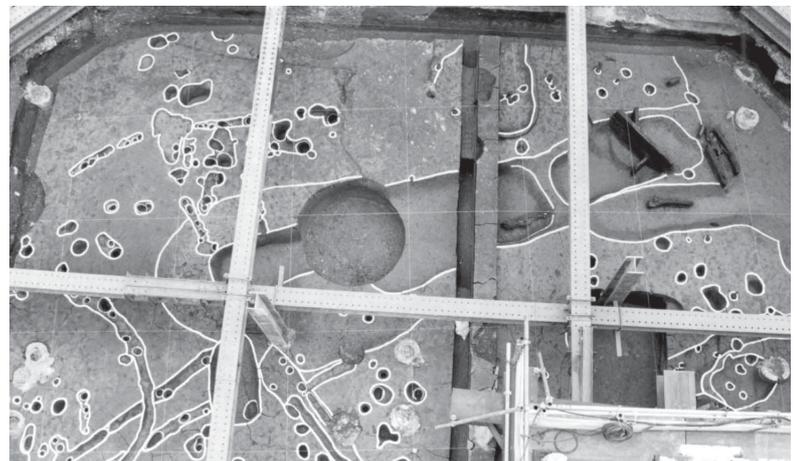


図4.9 弥生時代中期初頭（畿内第Ⅱ様式期）の遺構群。1A～1C区全景。北より撮影。

沈下を防ぐための工夫が施されていた。平面プランが不明確で確証に乏しいが、建物の沈下が認められ、またそれに対処するための工夫が施されていることから、柱には相当な荷重がかかっていたと考えられ、MD1上面の土坑群および柱穴群には高床建物の柱穴があると想像される。また、地層からはこの時期には地下水位が上昇傾向にあることが推測され、周辺の湿気を避けるために盛土を施し、さらにその上に高床建物を建てたことは首肯できる。

弥生時代中期初頭第2面に伴う遺構群は同1面形成時の大規模な掘削から免れた調査地南東部(図4.22)やMD1基盤層上面(図4.21)、わずかにDC4~6壁面および底面で検出した。幅が狭く、浅い溝(図4.22)や柱穴、多数の杭および杭列(図4.23,245)がみられた。

弥生時代中期初頭第2面に確実に供伴する遺物の中で時期を特定できる土器はないが、第1面のDC4,5,6やEP7,8,9形成時に第2面に供伴する遺物を一緒に攪乱していることから、第1面を覆う堆積層中には第2面に供伴する遺物が混入していると考えられる。しかしながら、同堆積層中から出土する土器には大きな型式差がみられず弥生時代畿内第II様式の範疇に収まり、第1面と第2面には時期差はないと判断される。



図4.10 弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺構群。DC4Aとその周辺の柱穴群および杭群。DC4からは多数の材化石が出土した。1A区。北西より撮影。

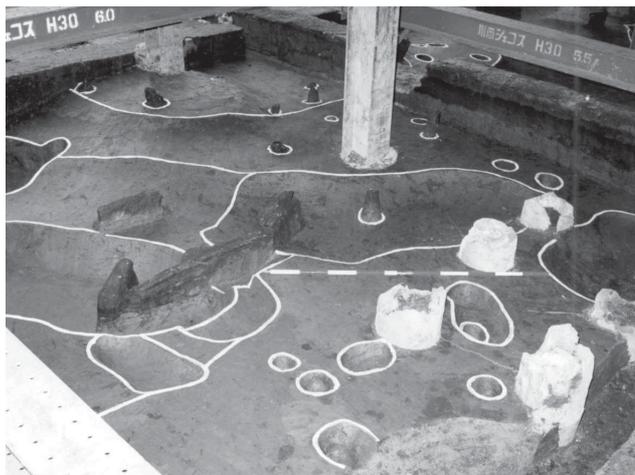


図4.11 弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺構群。中央右の遺構はDC6A。中央奥はMD1の肩付近。直立状態の杭および柱が多数みられる。4A区。北西より撮影。



図4.12 DC4材化石および土器出土状況(1)



図4.13 MD1の検出状況。MD1上には柱が分布していた。



図 4.14 K15 と柱穴埋土断面 .



図 4.15 K21 と柱穴埋土断面 .



図 4.16 K22 と柱穴埋土断面 .

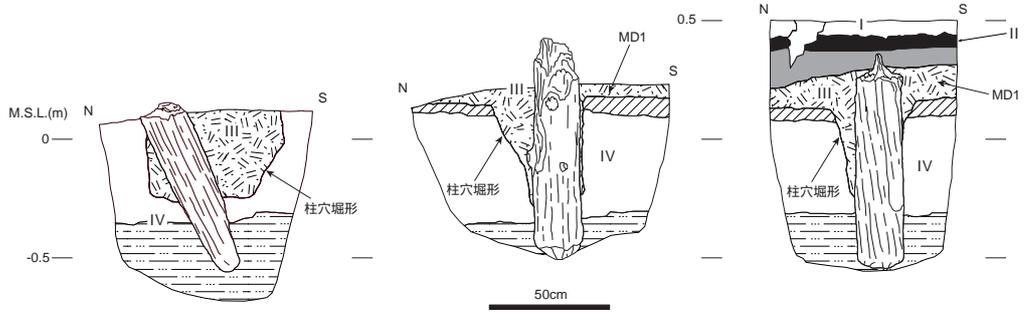


図4.17 K15(左),K21(中),K22(右)とそれぞれの柱穴埋土断面図 建物の荷重により, 柱は柱穴下底を突き抜けて下方へ押し込まれている .



図 4.18 EP22 の底で検出された木片 . 柱の沈下を防ぐために柱穴の底に敷き詰められたものと考えられる .



図 4.19 EP21 で検出された木片 . EP22 の例と同様, 柱の沈下を防ぐためのもの .



図4.21 MD1下面で検出した遺構群 . 弥生時代中期初頭(畿内第II様式期). MD1上面では遺構の認定が困難であったが, 同下面ではそれらを検出できた . 所々に直立した柱がみられる . 北より撮影 .

図 4.22 弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)の遺構群 . 2B ~ 1C 区全景 . 北西より撮影 .



図 4.20 EP13 で検出した根絡み柱 . 建物の沈下を防ぐための工夫がみられる . 柱は K145 .

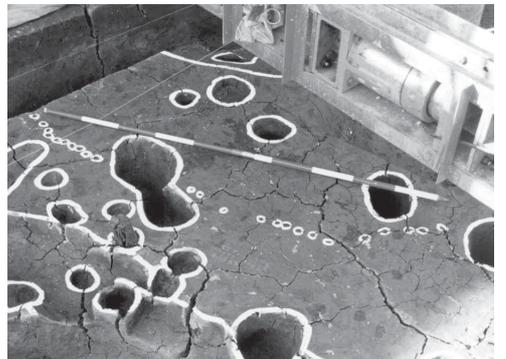
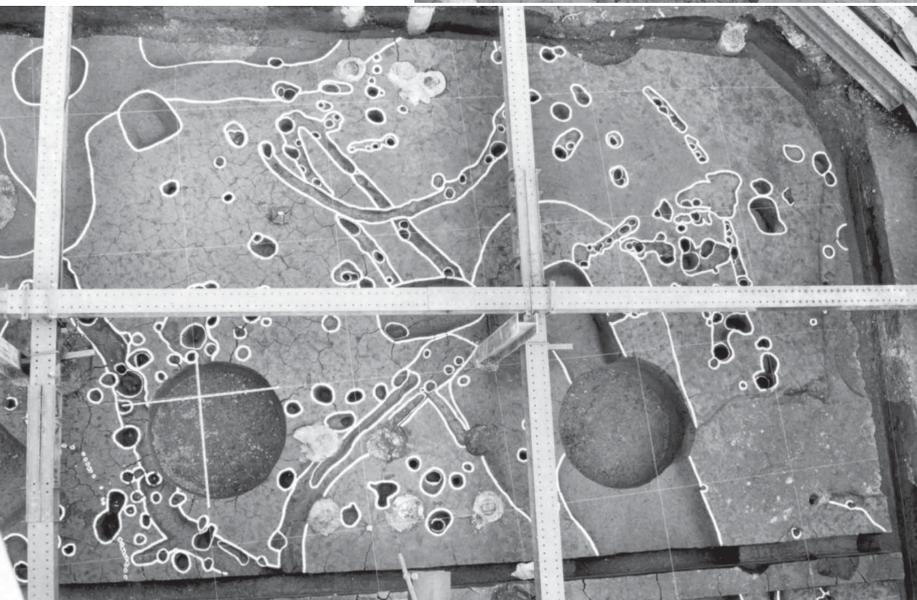


図 4.23 2B 区北西隅付近 . 小さな杭が一列に並んでいる様子が見える .

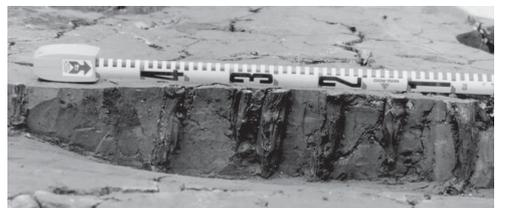


図 4.24 小さな杭群(上図)の断ち割り .

第5章 遺物

土器

・古代以降の土器

機械掘削時に採集した土器や標高0.3m付近で検出した遺構から出土した土器があるが、いずれも破片が多く、時期を特定できたものは僅かである。

DC1で出土した202は須恵器の杯身で、口縁は外反しながら立ち上がり、底部には高台をもつ。陶邑II型式3段階（7世紀後半）に併行する。

DC3出土196は中世の瓦質三足釜、199は13世紀後半～14世紀前半の和泉型の瓦器椀である。197および198は陶器の破片で近世のものと考えられる。

EP4出土201は13世紀後半～14世紀前半の和泉型の瓦器椀、200は6世紀ごろの須恵器高杯の脚部である。

・II層およびEP6出土土器

II層出土土器には広口壺（006, 040, 050, 090, 141）、短頸壺（081）、無頸壺（063, 191）、高杯（031）がみられる。006, 090, 141は受け口状の段をもつもので、口縁はいずれも上に拡張する。006は口縁外面に稚拙な櫛描簾状文がみられるが、090, 141のそれは摩耗が著しい。いずれも畿内第III様式に属する。040は口縁端面に波状文があり、頸部から胴部上半にはタテ方向のハケの後に櫛描直線文が施されている。畿内第III様式に属する。050は無文の広口壺で、畿内第II～III様式に属する。081はゆるやかに外反する口縁をもち、口縁端面には櫛描直線文、頸部には櫛描直線文と櫛描扇形文が合わさった疑似流水文がみられる。畿内第II～III様式に属する。063は無文で口縁が内湾しながら立ち上がる。畿内第II～III様式に属すると考えられる。191は直立する口縁をもち、櫛描直線文がみられる。畿内第II様式に属する。031は高杯の脚部で文様はみられない。畿内第II様式に属すると考えられる。

EP6出土土器には広口壺（165）、甕（002, 007, 164）、鉢もしくは高杯（167）がみられる。165の口縁はやや外反気味にロート状に広がり、口縁端は垂下し面をもつ。口縁端面、頸部には櫛描直線文がみられる。164は「く」の字状に鋭く屈曲する口縁をもち、胴部外面にはハケが施されている。002は胴部～底部外面にタテ方向のハケが施されている。007は表面の風化が著しく調整が不明瞭。以上の甕はいずれも畿内第III様式に属する。167は口縁直下に沈線がみられ、ヨコ方向のヘラミガキが丁寧に施されている。畿内第II～III様式に属すると考えられる。

・III層および弥生時代中期初頭第1面の遺構群出土土器

III層出土土器には広口壺（083）、長頸壺（051）、壺（068, 037）、甕（001, 064, 080, 082）、鉢（099）、蓋（076）、手づくね（059）がみられる。083の口縁は外反しながらロート状に広がり、端部には面をもつ。口縁端面はナデによって中央に窪みがみられ、頸部には櫛描直線文が施されている。051

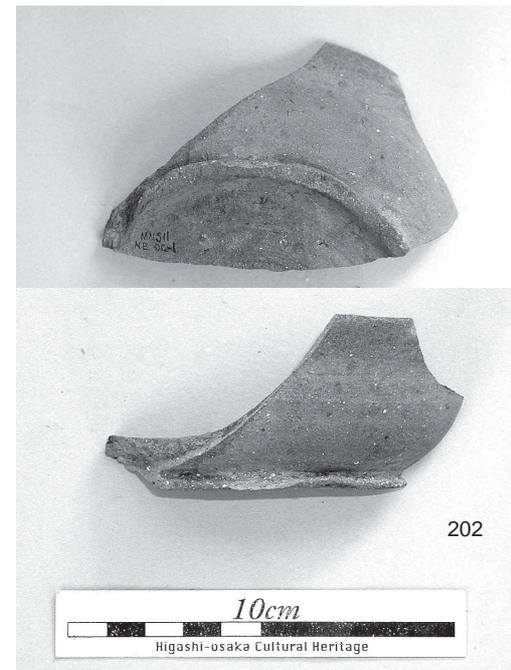


図5.1 DC1出土須恵器杯身

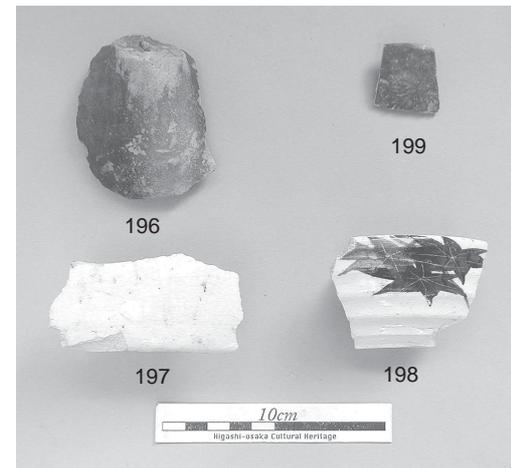


図5.2 DC3出土瓦器および陶器

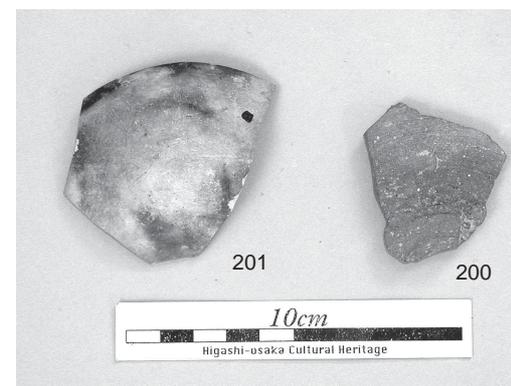


図5.3 EP4出土瓦器および須恵器

表5.1 出土土器一覽(1)

No.	系統	器種(形式)	土器型式(時期)	地区	層準・遺構	器高(cm)	口径(cm)	備考
001	弥生土器	甕	畿内第Ⅲ様式		Ⅲ層(中央南北断面沿いトレンチ)	21.7 *	21.5 *	煤付着
002	弥生土器	甕	畿内第Ⅲ様式	1B	EP6		10.8 *	
003	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	2B	DC6A(中央南北断面沿いトレンチ)	23.9	18.4 *	頸部外面に煤付着
006	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅲ様式	2A	Ⅱ層		24.8	有段口縁, 櫛描簾状文・刺突文
007	弥生土器	甕	畿内第Ⅲ様式	1B	EP6	11.3 *		煤付着
013	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	3C	DC5			大和系, 口縁端刻み目, 外面タテハケ・内面ヨコハケ
014	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5B	DC6			紀伊系, 胴部ヨコ～ナナメズリ, 067と同一個体, 煤付着
015	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	3C	DC5	17.6 *		底部にヘラ描直線
018	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅱ様式	5C	DC6		17.9 *	櫛描直線文・波状文
019	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅱ様式	5C	DC6	15.1 *	30 *	カクセン石含む
021	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	2A	EP8	19.1 *	23 *	
025	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	1A	DC4C(M)	15.1 *	16.2 *	頸部外面煤付着
027	弥生土器	長頸壺	畿内第Ⅱ様式	1B	DC4C(L)	11.6 *	18.1	櫛描直線文
028	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	1A	DC4			煤付着
029	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	1C	DC4D(M)			煤付着
031	弥生土器	高杯	畿内第Ⅲ様式	1A	Ⅱ層			
032	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	1B	DC4C(L)	15.1 *	21.8	紀伊系, 煤付着
034	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	1A	DC4C(M)		29.6 *	
036	弥生土器	無頸壺(小型)	畿内第Ⅱ様式	1A	DC4C(M)	13.1 *		調整・成形稚拙
037	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	2A	Ⅲ層	11.2 *		底部に輪状の押圧痕
040	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅲ様式		Ⅱ層			櫛描直線文・波状文
041	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	1B	DC4C(L)		19.8 *	大和系, 外面タテハケ・内面ヨコハケ
045	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5A	DC6		24.4 *	煤付着
050	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅱ～Ⅲ様式	3A	Ⅱ層		18.5 *	
051	弥生土器	長頸壺	畿内第Ⅱ様式	3A	Ⅲ層	20.9 *		櫛描直線文
059	弥生土器	手づくね	-	3A	Ⅲ層	5.4 *		
060	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	4B	MD1			櫛描直線文
061	弥生土器	壺(大型)	畿内第Ⅲ様式	4B	Ⅲ層			櫛描扇形文・直線文
063	弥生土器	無頸壺	畿内第Ⅱ～Ⅲ様式	4B	Ⅱ層		13.8 *	2孔一対の穿孔
064	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5A	Ⅲ層	15.1 *		
066	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	3A	DC5			櫛描直線文・波状文
067	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5B	DC6			煤付着
068	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	3A	Ⅲ層		12.9 *	櫛描直線文
070	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5A	DC6E		25.7 *	紀伊系, 胴部ヨコナナメズリ, 煤付着, 014と同一個体
072	弥生土器	甕(大型)	畿内第Ⅱ様式	5B	DC6		36.8 *	大和系, 口縁端上下に刻み目, 外面タテハケ・内面ヨコハケ
076	弥生土器	蓋	-	4A	Ⅲ層	9.4 *		
080	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5B	Ⅲ層		23.9 *	
081	弥生土器	壺	畿内第Ⅱ様式	5B	Ⅱ層			カクセン石含む
082	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ～Ⅲ様式	5B	Ⅲ層	3.2 *		底部穿孔
083	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅱ様式	5B	Ⅲ層		29.2 *	櫛描直線文
090	弥生土器	壺	畿内第Ⅲ様式	5C	Ⅱ層	6 *		有段口縁, 141と同一個体
099	弥生土器	鉢	畿内第Ⅱ様式	5C	Ⅲ層			把手付
102	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	5C	DC6			大和系, 外面タテハケ
112	弥生土器	壺	-	1B	DC4C(M)			口縁端面にヨコ方向とタテ方向の櫛描直線文, 口縁端下の刻み目は貼り付け
125	弥生土器	短頸壺	畿内第Ⅱ様式	3C	DC5			櫛描直線文
126	弥生土器	把手	畿内第Ⅱ様式	3C	DC5			水差しか?
127	弥生土器	蓋	-	3C	DC5	10.7 *		
129	弥生土器	短頸壺	畿内第Ⅱ様式	1B	DC4C(U)			櫛描直線文
132	弥生土器	ミニチュア壺	畿内第Ⅱ様式	2A	EP8			
141	弥生土器	壺	畿内第Ⅲ様式	5C	Ⅱ層			有段口縁, 090と同一個体
149	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅱ様式	1B	DC4C(L)			櫛描直線文
152	弥生土器	鉢	畿内第Ⅱ様式	2A	EP8			櫛描直線文
159	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	3A	DC5			大和系, 口縁端刻み目, 外面タテハケ
161	弥生土器	短頸壺	畿内第Ⅱ様式	2B	DC5F			
162	弥生土器	鉢	畿内第Ⅱ様式	2C	EP10	10.7 *		把手付
163	弥生土器	短頸壺	畿内第Ⅱ様式	6B	EP9			
164	弥生土器	甕	畿内第Ⅲ様式	1B	EP6			
165	弥生土器	広口壺	畿内第Ⅲ様式	1B	EP6			櫛描簾状文
167	弥生土器	鉢	畿内第Ⅱ様式	1B	EP6			
170	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	6C	DC7	10.3 *		煤付着
173	弥生土器	甕	畿内第Ⅱ様式	2A	EP8			紀伊系, 煤付着

表 5.1 出土土器一覽(2)

No.	系統	器種(形式)	土器型式(時期)	地区	層準・遺構	器高(cm)	口径(cm)	備考
174	弥生土器	甕	-	6B	EP9			煤付着,ヨコ~ナメハケ
183	弥生土器	高杯	畿内第II様式	2B	DC5F			
188	弥生土器	短頸壺	-	4B	III層(中央南北断面沿いトレンチ)			
191	弥生土器	無頸壺	畿内第II様式	2C	II層			衝指直線文
192	弥生土器	広口壺	畿内第II様式	2B	DC5F		13.4 *	
196	瓦器	三足釜	中世	1C	DC3			
197	陶器		近世	1C	DC3			
198	磁器		近世	1C	DC3			
199	瓦器	椀	13世紀後半~14世紀前半	1C	DC3			和泉型
200	須恵器	高杯	6世紀	6B ^c	EP4			
201	瓦器	椀	13世紀後半~14世紀前半	6B ^c	EP4			和泉型
202	須恵器	杯身	陶邑II型式3段階(7世紀後半)	5C	DC1			

器高の*印は残存高,口径の*印は推定値を示す。

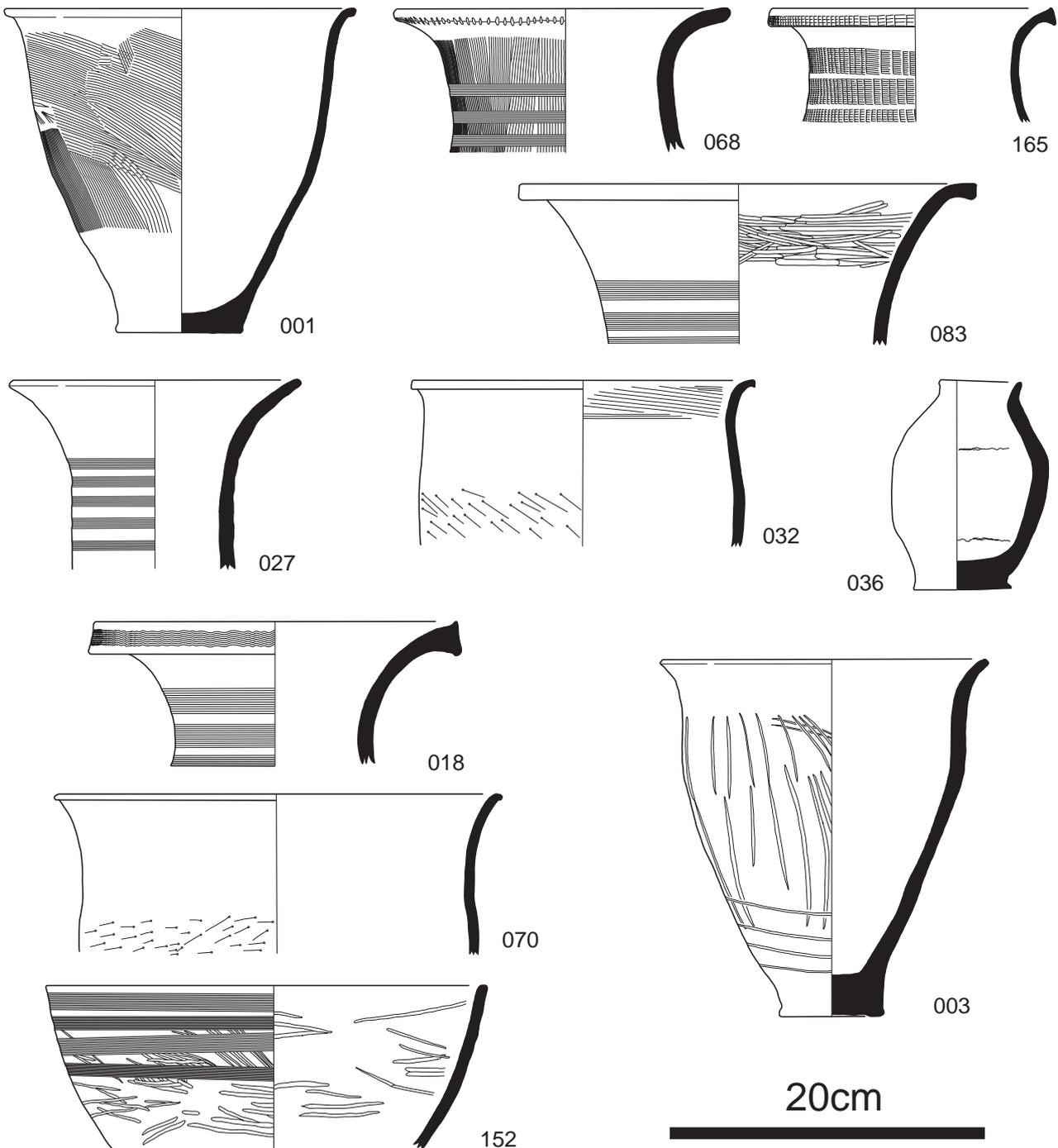


図 5.4 弥生土器実測図



图 5.5 II層出土弥生土器



图 5.6 II層出土弥生土器



图 5.7 II層出土弥生土器



图 5.8 II層およびEP6出土弥生土器

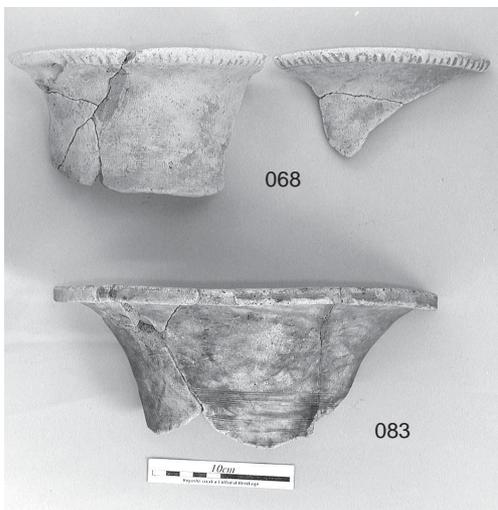


图 5.9 III層出土弥生土器

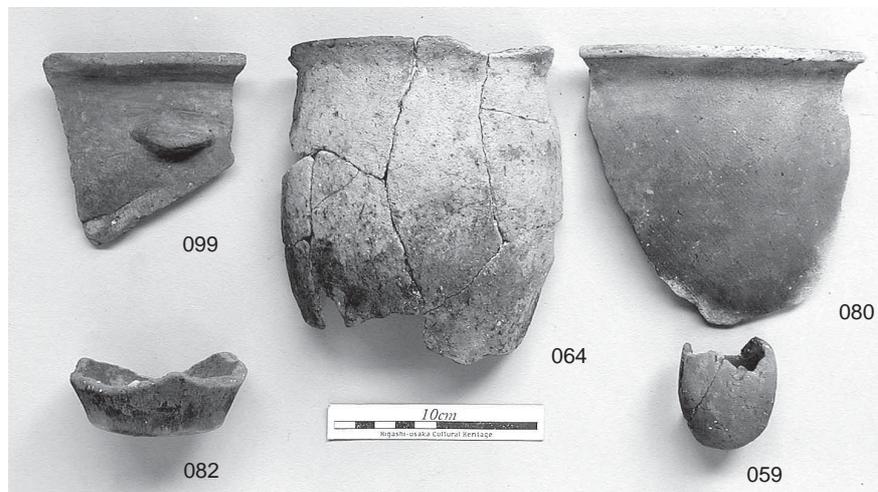


图 5.10 III層出土弥生土器

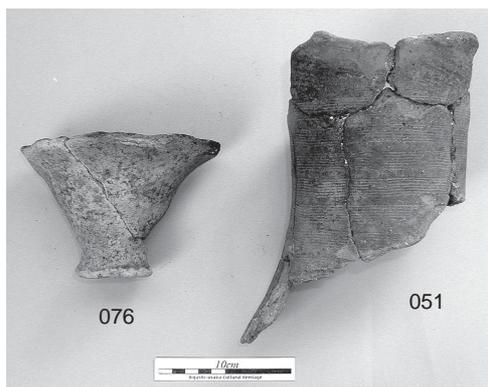


图 5.11 III層出土弥生土器



图 5.12 III層出土弥生土器

は頸部にやや押圧が加わった櫛描直線文がみられる。068の外反しながら立ち上がる口縁をもち、口縁端面下部には刻み目がみられる。037は底部のみが残存するが、底面には輪状の押圧痕がみられる。001,064,080は緩やかに外反する口縁をもち、064,080は胴部中央付近に最大直径がある。001,080の外面にはハケが施されている。082は底部のみが出土した。099は把手をもつ鉢で、把手はやや下方に垂れ下がっている。076はやや裾部がのび、頂部中央には窪みがある。風化が著しく調整は不明瞭。059は口縁がやや内側に湾曲する猪口型の手づくね土器。いずれの土器も畿内第II様式に属する。

DC4出土土器には長頸壺(027) 広口壺(149) 無頸壺(036,129) 壺(034,112) 甕(025,028,029,032,041)がみられる。027は外反しながら広がる口縁をもち、頸部には櫛描直線文が施されている。149はおそらくは広口の口縁をもつと考えられ、頸部および胴部は丁寧にヘラミガキが施され、頸部と胴部境界には多条沈線がみられる。036はやや粗雑な成形のミニチュア壺で、表面にはヘラミガキが施されている。129はやや外反気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端部には刻み目が、頸部には櫛描直線文がみられる。034は球形の胴部をもつ壺で頸から口縁部を欠損する。おそらくは長頸の広口壺と考えられる。風化が著しく調整は不明瞭。112は口縁部のみ出土した。端面はタテ方向とヨコ方向の櫛描直線が交互に組み合わさった文様が施され、貼り付けの刻み目文様がみられる。032は紀伊系の甕で、頸部と胴部の境界に緩やかな段をもち、胴部はナナメ方向のケズリが施されている。口縁部内面にはハケがみられる。025,028,029,041はゆるやかに外反しながら広がる口縁をもち、表面の風化が著しく調整は不明瞭で、煤の付着が著しい。いずれの土器も畿内第II様式に属する。



図 5.14 DC4 出土弥生土器

図 5.13 DC4 出土弥生土器

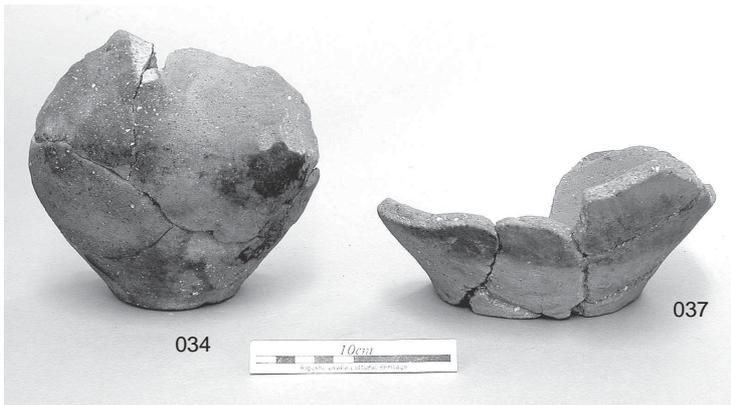


図 5.16 DC4 出土弥生土器

図 5.15 DC4 および III層出土弥生土器



图 5.17 DC4 出土弥生土器



图 5.18 DC4 出土弥生土器

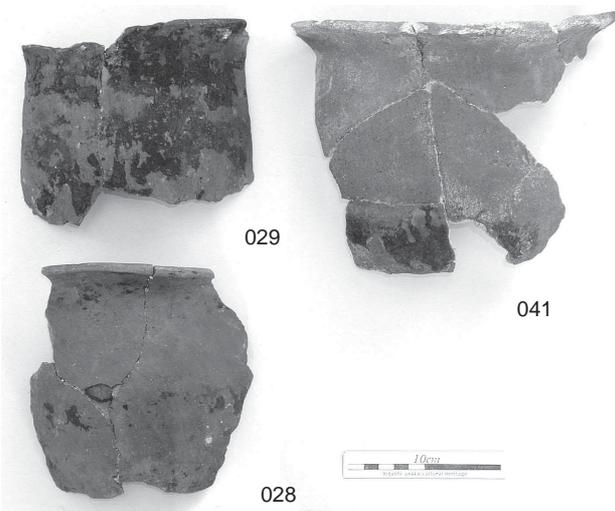


图 5.19 DC4 出土弥生土器

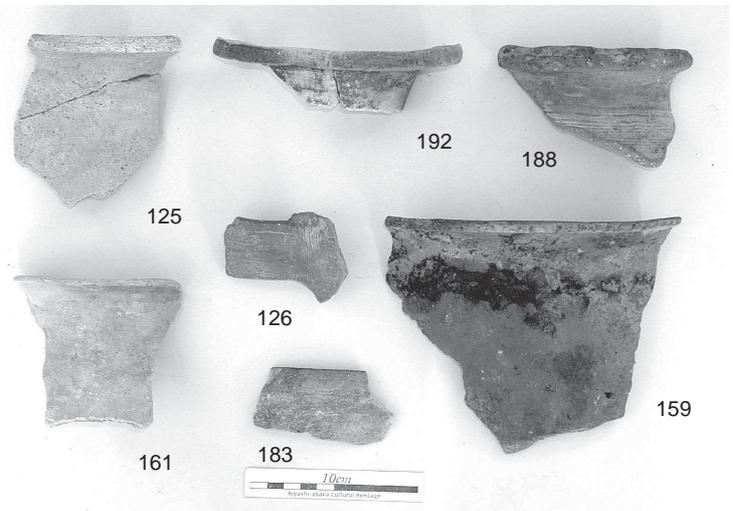


图 5.20 DC5 出土弥生土器

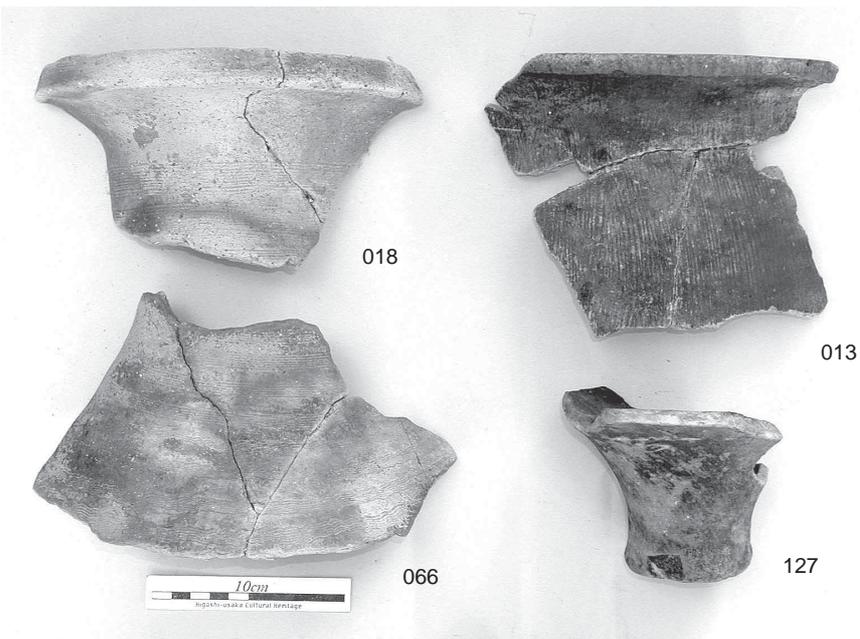


图 5.21 DC5 および DC6 出土弥生土器



图 5.22 DC5 出土弥生土器

DC5出土土器には広口壺(192)、短頸壺(125,161,188)、壺(015,066)、甕(013,159)、高杯(183)、把手(126)、蓋(127)がある。192は口縁は外反しながらロート状に広がる口縁をもつ。表面の風化が著しく調整は不明瞭。125,161,188は外反しながら短く立ち上がる口縁をもち、125の口縁短面には波状文、188には矢羽状の文様がみられる。161は無文で、188の胴部には櫛描直線文が施されている。015は胴部～底部のみ残存。表面の調整はミガキ。066はおそらくは長頸壺の胴部片と考えられ、櫛描直線文と波状文が施されている。013は口縁端部に刻み目をもち、口縁内面はヨコ方向のハケ、胴部はタテ方向のハケが施されている。159は口縁端部に刻み目をもち、胴部はタテ方向のハケが施されている。いずれも大和型の甕。183は内湾形の高杯口縁部で、調整は不明瞭。126は鉢の把手と考えられ、表面には櫛描直線文がみられる。いずれの土器も畿内第II様式に属する。

DC6出土土器には広口壺(018,019)、甕(003,014,045,067,070,072,102)がある。018は受け口状の段をもち、口縁は上方に拡張する。頸部には櫛描直線文が施されている。019は外反しながらロート状に広がる口縁をもち、口縁短面はヨコナデが、頸部はミガキが施されている。003は最大径を胴部上半にもつ。067は僅かに外側へ折り曲げられた口縁をもち。045は緩やかに外反しながら立ち上がる口縁をもち、端部は丸く収められている。外面にタテ方向のハケ調整がみられ、大和型の甕と考えられる。072は口縁端面上下に刻み目をもち、口縁内面はヨコ方向のハケ、外面はタテ方向のハケが施されている。大型の大和型甕と考えられる。014および070は同一個体である。頸部と胴部の境界に緩やかな段をもち、胴部はナナメ方向のケズリが、口縁部内面には粗いハケが施されている。紀伊系の甕。



図 5.23 DC6 出土弥生土器

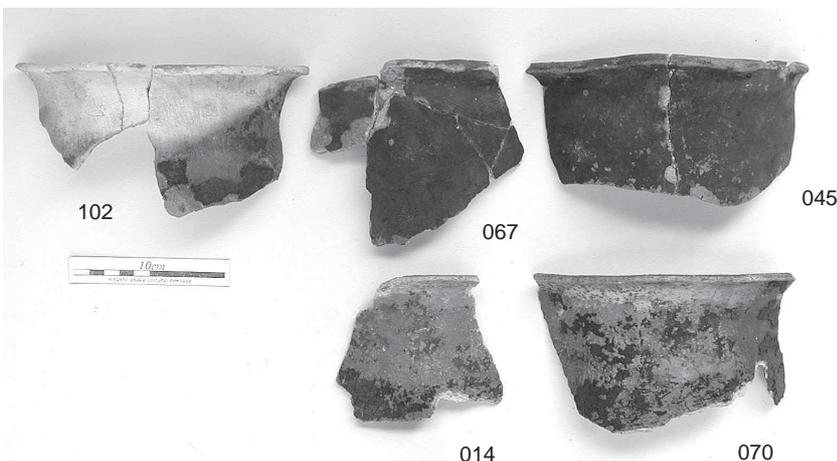


図 5.24 DC6 出土弥生土器



図 5.25 DC6 出土弥生土器



図 5.26 DC6 出土弥生土器



図 5.27 DC7 出土弥生土器

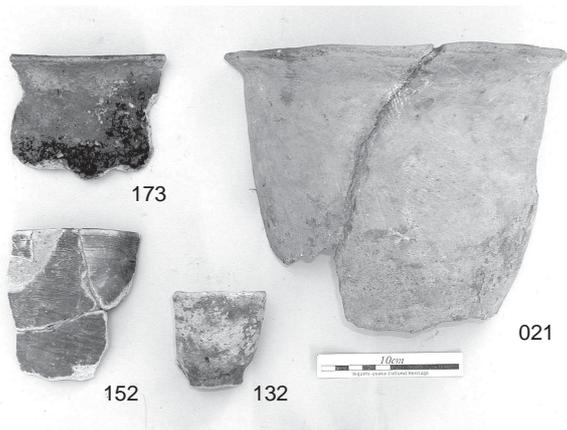


図 5.28 EP8 出土弥生土器

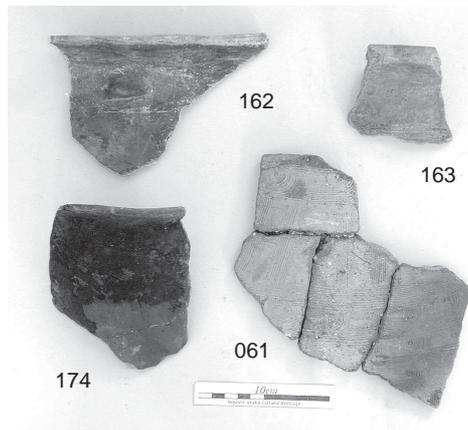


図 5.29 EP9, 10 および III 層出土弥生土器

図 5.30 MD1 出土弥生土器

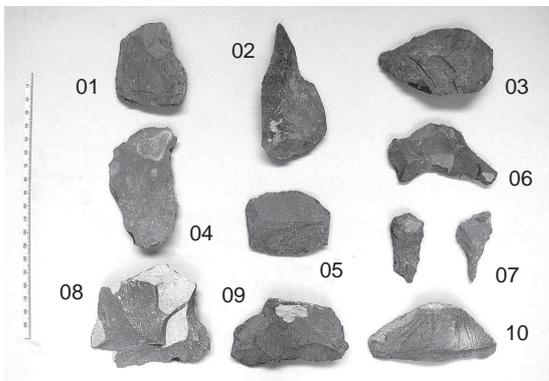


図 5.31 III 層出土打製石器

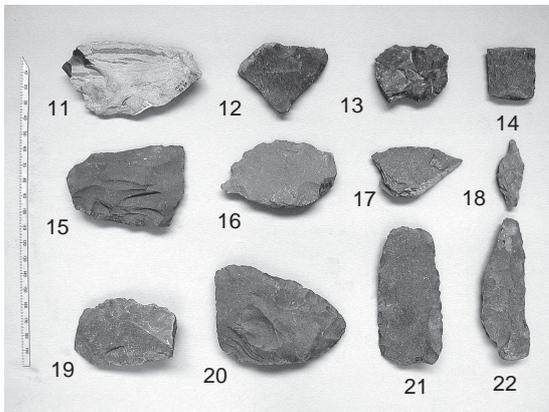


図 5.32 III 層出土打製石器

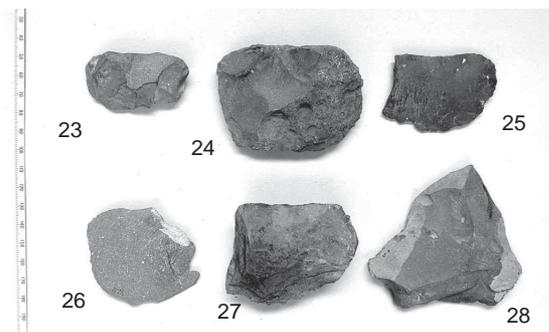


図 5.33 EP6 および DC6 出土打製石器

いずれの甕も表面の煤の付着が著しい。いずれの土器も畿内第II様式に属する。

DC7 出土遺物には 170 の甕底部のみがみられた。畿内第II様式に属する。

EP8 出土土器には甕 (021, 173)、鉢 (152)、ミニチュア甕 (132) がみられる。021 は逆釣鐘形状をもち、表面には粗いハケが施されている。173 は頸部と胴部の境界に緩やかな段をもつ紀伊系の甕。152 は外面にミガキを施した後、口縁下位に 4 条の櫛描直線文が施されている。132 は粗雑な成形で、表面の風化が著しく調整不明瞭。

EP9 出土土器には口縁下位に櫛描直線文が施された短頸壺 (163) のみがみられた。

EP10 出土土器には外反しながら立ち上がる口縁をもつ把手付き鉢 (162) と外面にハケが施され、煤の付着が著しい甕 (174) がみられる。

MD1 出土土器には数条の櫛描直線文が施された壺 (060) のみがみられた。

以上の出土土器のうち弥生時代中期初頭 (畿内第II様式) に限れば紀伊系の甕や大和型甕の出現率が高く、周辺の調査地点での同時期の土器と同じような傾向にある。

石 器

・打製石器

打製石器は III 層 (01 ~ 22)、EP6 (23)、DC6 (24, 27, 28)、DC4 (25 ~ 38)、DC5 (39 ~ 46) から出土した。供伴した土器型式から判断して 23 は弥生時代中期中葉 (畿内第III様式期) に、それ以外のは弥生時代中期初頭 (畿内第II様式期) に併行する。岩石種は 13 は褐色のチャート、他は二上山産サヌカイトである。以下の石器タイプおよびサブタイプは松田 (1996) に従った。

III 層出土打製石器には槍形もしくは剣形両面調整尖頭器 (14)、刃部両面調整直刃削器 (20)、刃部両面調整凸刃削器 (16)、刃部片面

調整不完全両面調整直刃削器(15)、刃部両面調整複刃削器(01,21,22)、えぐりのある刃部両面調整複刃削器(06)、不完全片面調整複刃削器(05)、刃部両面調整複刃尖頭削器(03)、石錐(07)、剥片(02,04)、細部調整剥片(12,17)、石核A(08,09)、石核B(10,13,19)、原礫(11)がある(図5.31,32)。これらのうち01,10,15の刃部にはこすれや打撃にともなう潰れが、03の基部には敲打痕がみられる。

DC6出土打製石器には剥片(26,28)と石核A(24,27)がみられた(図5.33)。

EP6出土打製石器には石核B(23)のみがみられた(図5.33)。

DC4出土打製石器には槍形両面調整尖頭器(37,38)、小型槍形両面調整尖頭器(34)、打製石鏃(30)、石錐(31)、剥片(33,35)、石核A(36)、石核B(32)がある(図5.34)。35の縁辺には敲打痕が集中する。34,37は表面が研磨されている。

DC5出土打製石器には槍形両面調整尖頭器(46)、小型槍形両面調整尖頭器(45)、刃部片面調整不完全両面調整直刃削器(44)、剥片(42,43)、石核A(40)、石核B(41)がある(図5.35)。

・磨製石器

磨製石器はIII層(04,06,07,09,10)、DC4(01)、DC5(03,05)、DC6(02)から出土し、08と11は出土地点がわからない。いずれも弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)に併行する。01~08,10は石包丁、11は小型の偏平片刃石斧であり、09は石包丁を作成するための素材と考えられる。01~10は三波川帯で産出する緑色~淡緑色の結晶片岩で、紀ノ川沿岸域で採取されたものと考えられる。11は泥岩。

・礫器

いずれも器種や用途については明らかではない。円磨の度合いから判断し、01~03,05,08~10は花崗岩もしくははんれい岩の、11は二上山産サヌカイトの河床礫と考えられる。04,06,07は砂岩製で06と07には焼成痕がみられる。

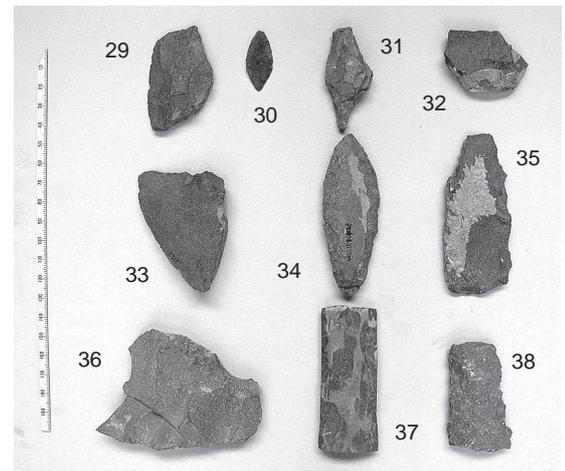


図5.34 DC4出土打製石器

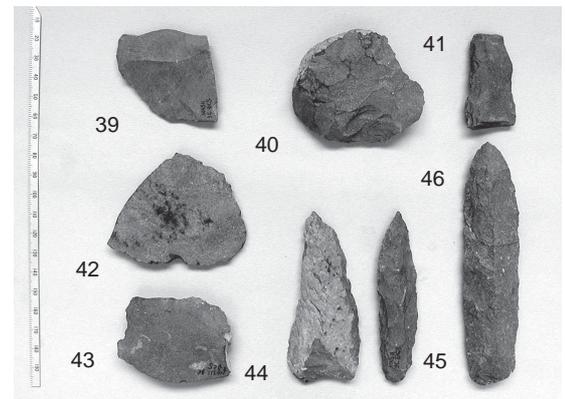


図5.35 DC5出土打製石器

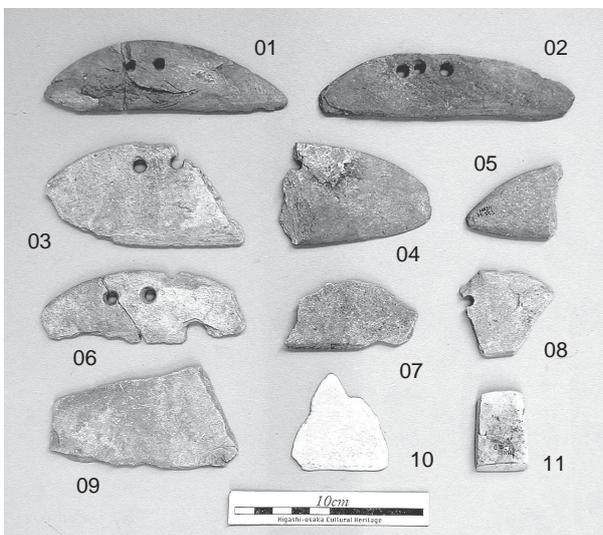


図5.36 磨製石器

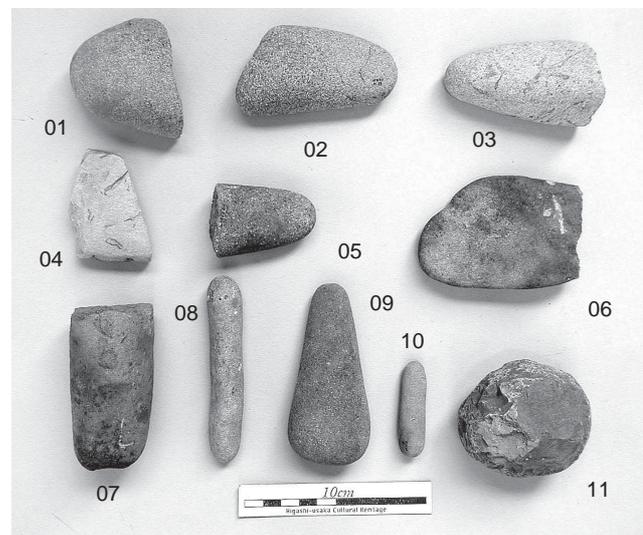


図5.37 礫器

木製品

弥生時代中期初頭第1面、同2面で直立状態で検出した杭や柱、あるいはそれぞれの面にもなう遺構群から出土した加工木がみられた。このうち現地で確認できた直立状態で検出した杭や柱は120点以上あった(表5.2)。

柱(001~007, 020, 183, 194, 197, 198, 200)はMD1上面およびMD1に伴う柱穴とその周辺に分布する柱穴から出土したもので、先述の高床建物の柱と理解される。EP13で出土した183の柱と145の根絡み材は現地で組合わされた状態で確認できた(図4.00)。また、053の礎板と004の柱は同じ柱穴内から出土しており、この組み合わせも建物の沈下を防ぐためのものと考えられる。

杭や柱以外の木製品の出土は顕著ではなく、わずかに鍬(051)、刺突具(022)、容器(106)などがみられたのみである。

文献

松田順一郎 1996 IV-1. 打製石器。「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊, 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会, 57-121。



図 5.38 根絡み柱(183)



図 5.40 根絡み材(145)



図 5.41 柱(004)



図 5.42 礎板(053)



図 5.39 根絡み柱基部(183)



図 5.43 刺突具(022)



図 5.44 鍬(051)



图 5.45 柱(001)



图 5.46 柱(002)



图 5.47 柱(003)



图 5.50 柱(007)



图 5.48 柱(005)



图 5.49 柱(006)



图 5.51 柱(020)

表5.2 出土木製品一覽(1)

No.	器種	併行時期	地区	層準・遺構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考
001	柱	弥生時代畿内第II様式	4B	MD1上面		79.5	20.5	K22
002	柱	弥生時代畿内第II様式	4A	MD1上面		88.3	22.1	K21
003	柱	弥生時代畿内第II様式	4C	MD1上面		62.9	16.9	K100
004	柱	弥生時代畿内第II様式	3B	MD1上面		57.5	16.6	K146
005	柱	弥生時代畿内第II様式	4B	MD1上面		66.3	17	K132
006	柱	弥生時代畿内第II様式	4A	MD1上面		48.1	17.7	K15
007	柱	弥生時代畿内第II様式	4B	MD1上面		52.5	17.8	K139
008	杭	弥生時代畿内第II様式	2A	弥生時代中期初頭第2面		29.3	8.3	K2
009	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面		39.2	8.2	K34
010	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面		42.2	7.8	K39
011	杭	弥生時代畿内第II様式	1C	弥生時代中期初頭第2面		31.2	7	K58
012	杭	弥生時代畿内第II様式	2B	弥生時代中期初頭第2面		34.1	11.9	K70
013	杭	弥生時代畿内第II様式	4C	弥生時代中期初頭第2面		25.3	7.8	K102
014	杭	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		46.4	13.3	
015	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	弥生時代中期初頭第2面		19.4	3.7	K43
015	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	弥生時代中期初頭第2面		18.8	2.5	K43
016	杭	弥生時代畿内第II様式	3B	弥生時代中期初頭第2面		11.2	4.8	K119
017	杭	弥生時代畿内第II様式	4B	弥生時代中期初頭第2面		15.2	3.8	K144
018	杭	弥生時代畿内第II様式		DC		115.7	8	
019	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面		42	4.7	K15
019	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面		41.5	6.7	K15
019	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面		25	5.1	K15
020	柱	弥生時代畿内第II様式	4B	EP11		22.8	16.2	
021	部材	弥生時代畿内第II様式		DC4U		6.1	2.1	
022	刺突具(棒)	弥生時代畿内第II様式		中央南北断面		16.2	0.7	
023	杭	弥生時代畿内第II様式		DC4L		8.7	4.6	
024	杭	弥生時代畿内第II様式	2A			6.3	6.4	
025	材	弥生時代畿内第II様式				11.6	5.1	
026	材	弥生時代畿内第II様式		DC4M		46.1	2.3	焼痕
027	材	弥生時代畿内第II様式		DC4L		58.2	4.6	
028	部材	弥生時代畿内第II様式		DC5		35.8	3	
029	材	弥生時代畿内第II様式		DC5		59.7	10.2	
029	材	弥生時代畿内第II様式		DC5		61.7	10.6	
030	材	弥生時代畿内第II様式	1A	DC4A		61.9	6.7	
031	材	弥生時代畿内第II様式	1A	DC4A		45.8	6.4	
032	材	弥生時代畿内第II様式	1A	DC4A		34.7	4.2	
033	材	弥生時代畿内第II様式	1A	DC4A		7.6	3.1	
034	材	弥生時代畿内第II様式	1A	DC4A		46.5	6	
035	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	DC4C		46	6.2	
036	杭	弥生時代畿内第II様式		EP19		36.4	5.6	
037	材	弥生時代畿内第II様式		DC4C		11.4	5.2	焼痕
039	杭	弥生時代畿内第III様式		II層		24.3	7.4	
040	笏	弥生時代畿内第II様式		DC6		34.5	1.7	
041	板状加工木	弥生時代畿内第II様式		DU4U	4.6	25.7	1.4	
042	棒状加工木	弥生時代畿内第II様式		DU4U	1.5	21.9	1	
043	加工木	弥生時代畿内第II様式		DU4U	3.8	6.8	2.3	
044	材	弥生時代畿内第II様式		MD1	6	14.7	2.8	
045	加工木	弥生時代畿内第II様式		MD1	9.2	26.7	6.4	
046	材	弥生時代畿内第II様式		DC4U~M	4.5	39.9	3.3	
047	材	弥生時代畿内第II様式		II層		16.2	10.7	
048	材	弥生時代畿内第II様式	4A	DC6A	11.2	52.2	12	
049	杭	弥生時代畿内第II様式		II層		15.1	9.5	
050	材	弥生時代畿内第II様式	6A	EP9		25	7.4	
051	鍬	弥生時代畿内第II様式		DC5	16.3	29.2	3.7	
052	杭	弥生時代畿内第II様式	5C	DC8		16.7	5.2	
053	礎板	弥生時代畿内第II様式	3B		11.2	22.7	1.5	K146と同じ柱穴内
054	材	弥生時代畿内第II様式		MD1	8.3	28.2	3.7	
055	加工木	弥生時代畿内第II様式		MD1	7.9	17.5	3.7	

表 5.2 出土木製品一覽(2)

No.	器種	併行時期	地区	層準・遺構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考
056		弥生時代畿内第Ⅱ様式	2A	EP8			21.1	6.7
057	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5			18	5.7
058	杭	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5			24.7	9.6
059	加工木(板)	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP13	8	20.3	1.9	
060	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP13	9	23.3	4.2	
061	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP13	4.9	13.1	3.1	
062	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6			21	6.4
063	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6	8.3	10.1	3.9	
064	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	9.4	23.6	6.2	
065	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6D	4.6	62.2	3.5	焼成痕
066	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP15	5.4	24.5	3.9	
067	杭	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP15	4	23.9	3.2	
068	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP15	6.8	42.3	4.4	
069	杭?	弥生時代畿内第Ⅱ様式	3B	EP14	7.1	14.3	6.2	
070	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4(西壁)	10.9	16.2	3.9	面取り
071	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6	8.1	50.9	5.7	
072	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4			72.8	12.4
073	杭	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央南北断面			30.3	8.4
074	杭	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央南北断面			21	6.3
075	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央南北断面			43.6	9.1
076	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	4	13.7	2.6	
077	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	3.8	20.3	1.7	
078	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	3.7	40.7	3.1	
079	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4L	4.1	31.7	2.8	先端部焼痕
080	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC8	2.5	21.1	2.1	
081	棒状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	6.6	29.8	3.8	
082	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	6.2	19.9	4.2	
083	板状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	4.9	39	3	
084	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	2.1	13.8	1.3	
085	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	5.4	13.1	2.6	
086	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6F	4.3	28.5	0.7	
087	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	10.3	22.8	7.1	切り口あり
088	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	5.6	55.6	4.6	
089	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	5.2	28.7	3.7	
090	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	5.1	26.2	2.6	
091	半截された柱	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4B	EP16	16.8	24.7	7	
092	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4C	EP17	9.4	11.3	6.3	
093	樹皮	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC4(西壁)	10	77.5	0.5	
094	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	4C	EP17	11.5	27.7	12	
095	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	3.1	14.3	1.2	
096	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	3.2	10.1	3	
097	板材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC5	4.6	19.4	0.7	
098	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	2.4	9.5	2.2	
099	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	4.2	10.6	3	
100		弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	1.8	12.7	1	焼痕
101	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	3	9.4	1.1	
102	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	1.8	7.9	1.1	
103	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式	1A	DC4	2.9	7.9	3.1	焼痕
104	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		MD1	8.5	24.1	7.4	
105	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		中央南北断面	10	17.7	3.3	
106	容器	弥生時代畿内第Ⅱ様式		DC6			9.7	4.5
107	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	4.2	20.3	4.1	
108	棒状加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	3	24.5	4.1	
109	加工木	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	10.9	34.9	8.3	
110	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.5	16.9	4.3	
111	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.9	12.5	4.5	
112	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.5	33.4	4.9	
113	材	弥生時代畿内第Ⅱ様式		EP18	5.7	35.7	3.1	

表5.2 出土木製品一覽(3)

No.	器種	併行時期	地区	層準・遺構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考
114	材	弥生時代畿内第II様式		EP18		5.3	45.8	4.7
115	材	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		5.6	47.8	3.8
116	材	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		8	26.3	4.8
117	加工木	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		7	19.5	2.7
118	材	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		6.7	22.5	5
119	材	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		7	20.5	3.9
120	材	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		6.4	22.6	4.3
121	材	弥生時代畿内第II様式	4C	PT9		6.3	19.2	5.2
122	材	弥生時代畿内第II様式	4C	PT9		3.3	8.9	2.6
123	板材	弥生時代畿内第II様式	4C	PT9		3.6	19.1	1.7
124	板材	弥生時代畿内第II様式	4C	PT9		4.3	17.1	1.5
125	板材	弥生時代畿内第II様式	4C	PT9		3.4	31.5	1.4
126	杭	弥生時代畿内第II様式		弥生時代中期初頭第2面			27.2	11 K148
127	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	弥生時代中期初頭第2面	6	20.3	5.2	K51
128	杭	弥生時代畿内第II様式	1C	弥生時代中期初頭第2面	7.1	23	5.6	K57
129	杭	弥生時代畿内第II様式	2A	弥生時代中期初頭第2面	4.5	13.5	3	K30
130	杭	弥生時代畿内第II様式	2A	弥生時代中期初頭第2面	3.4	12.2	2.2	K30
131	杭	弥生時代畿内第II様式		弥生時代中期初頭第2面	3.5	9.6	3.2	K117
132	杭	弥生時代畿内第II様式	4B	MD1上面	8.5	21	7.5	K132
133	杭	弥生時代畿内第II様式	4B	弥生時代中期初頭第2面	9.9	30.9	3.5	K136
134	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面	9.5	18	9	K141
135	杭	弥生時代畿内第II様式		弥生時代中期初頭第2面	8.1	16.6	6.9	K105
136	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面	7.2	21.8	5.6	K11
137	杭	弥生時代畿内第II様式	4C	弥生時代中期初頭第2面	6.1	25.1	5.1	K104
138	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	弥生時代中期初頭第2面	10.1	35.3	7.5	K44
139	杭	弥生時代畿内第II様式	1C	弥生時代中期初頭第2面	6.1	12.6	3.3	K61
140	杭	弥生時代畿内第II様式	4C	弥生時代中期初頭第2面	4.6	41.6	3.5	K106
141	杭	弥生時代畿内第II様式	2A	弥生時代中期初頭第2面	5.7	14.7	5.6	K31
142	杭	弥生時代畿内第II様式	3B	弥生時代中期初頭第2面	4.7	38.8	1.6	K128
143	杭	弥生時代畿内第II様式	1C	弥生時代中期初頭第2面	5.7	11.6	4.8	K54
144	杭	弥生時代畿内第II様式	3B	弥生時代中期初頭第2面	3.1	10.4	2.5	K120*124
145	根絡み	弥生時代畿内第II様式	4B	EP13		5.9	15.5	6
146	杭	弥生時代畿内第II様式		弥生時代中期初頭第2面	6.5	15	6.1	K133
147	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面	5.5	19.5	2	K37
148	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面	9.2	19.1	7.4	K142
149	杭	弥生時代畿内第II様式	2C	弥生時代中期初頭第2面	6.5	29.6	5.1	K66
150	杭	弥生時代畿内第II様式	4C	弥生時代中期初頭第2面	8.3	28	5.9	K99
151	杭	弥生時代畿内第II様式	3B	弥生時代中期初頭第2面	11.6	18.7	7.8	K127
152	杭	弥生時代畿内第II様式	5A	弥生時代中期初頭第2面		30.2	8.3	K27
153	杭	弥生時代畿内第II様式	2A	弥生時代中期初頭第2面		25.6	8.8	K29, 焼痕
154	杭	弥生時代畿内第II様式	5B	弥生時代中期初頭第2面		24.3	6.2	K115
155	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面		18.1	6.8	K41
156	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面		28.1	8	K35
157	杭	弥生時代畿内第II様式	1C	弥生時代中期初頭第2面		43.8	9.4	K59
158	杭	弥生時代畿内第II様式	2C	弥生時代中期初頭第2面	7.8	20.8	4.9	K65
159	杭	弥生時代畿内第II様式	1C	弥生時代中期初頭第2面		36.7	8.3	K63
160	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	弥生時代中期初頭第2面	7.9	34.5	7.9	K47
161	杭	弥生時代畿内第II様式				11.9	5	
162	杭	弥生時代畿内第II様式	4A	弥生時代中期初頭第2面		8.9	4.8	K23
163	杭	弥生時代畿内第II様式	2B	弥生時代中期初頭第2面	3.5	13.7	2.4	K1
164	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面	4.9	19	2.5	K40
165	杭	弥生時代畿内第II様式	1A	弥生時代中期初頭第2面	5.3	8.9	4.6	K40
166	杭	弥生時代畿内第II様式	5C	弥生時代中期初頭第2面	1.8	13	2.8	K109*112
167	杭	弥生時代畿内第II様式	5C	弥生時代中期初頭第2面	3.2	14.7	2.8	K109*112
168	杭	弥生時代畿内第II様式	2A	弥生時代中期初頭第2面	3.4	14.7	3	K32
169	杭	弥生時代畿内第II様式	6A	弥生時代中期初頭第2面		11.9	5	K28
170	杭	弥生時代畿内第II様式	4C	弥生時代中期初頭第2面		19.1	9.2	K103
171	杭	弥生時代畿内第II様式	1B	弥生時代中期初頭第2面		23	10	K53

表5.2 出土木製品一覧(4)

No.	器種	併行時期	地区 層準・遺構・検出面	幅(cm)	長さ(cm)	直径(cm)	備考
172	杭	弥生時代畿内第II様式	2B 弥生時代中期初頭第2面		30.2	9.2	K69
173	杭	弥生時代畿内第II様式	4C 弥生時代中期初頭第2面		40.3	7.7	K98
174	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		40.4	7.7	K49
175	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		33.2	8.3	K46
176	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		34.6	6.5	K48
177	杭	弥生時代畿内第II様式	5B 弥生時代中期初頭第2面		37.3	8.8	K26
178	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		28.8	9.2	K50
179	杭	弥生時代畿内第II様式	4A 弥生時代中期初頭第2面		41.7	8.2	K19
180	杭	弥生時代畿内第II様式	3A 弥生時代中期初頭第2面		39.1	8.7	K11
181	杭	弥生時代畿内第II様式	5A 弥生時代中期初頭第2面		33.1	11	K25
182	杭	弥生時代畿内第II様式	2C 弥生時代中期初頭第2面		33.4	10.3	K68
183	根絡み柱	弥生時代畿内第II様式	4B EPI3		34.5	17.8	K145
184	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		49.6	9.4	K52
185	杭	弥生時代畿内第II様式	1C 弥生時代中期初頭第2面		24.5	8	K64
186	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		34	6.8	K45
187	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面		25	6.3	K45
188	杭	弥生時代畿内第II様式	3B 弥生時代中期初頭第2面		31.5	11.5	K126
189	杭	弥生時代畿内第II様式	3B 弥生時代中期初頭第2面		37.5	11.1	K95
190	杭	弥生時代畿内第II様式	1B 弥生時代中期初頭第2面	13.6	43.1	8.2	K42
191	杭	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面	7.4	45.1	11.9	K140
192	杭	弥生時代畿内第II様式	5B 弥生時代中期初頭第2面		53.5	8.4	K113
193	杭	弥生時代畿内第II様式	4A 弥生時代中期初頭第2面		44.1	13	K14
194	杭or柱	弥生時代畿内第II様式	4A 弥生時代中期初頭第2面		41.7	14.6	K17
195	杭	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面		57.7	9.4	K134
196	杭	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面		67.4	13.3	K131
197	杭or柱	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面		57.2	13.3	K129
198	杭or柱	弥生時代畿内第II様式	4C 弥生時代中期初頭第2面		51.1	15.1	K101
199	杭	弥生時代畿内第II様式	3B 弥生時代中期初頭第2面		47.3	12.3	K147
200	杭or柱	弥生時代畿内第II様式	3A 弥生時代中期初頭第2面		45.5	17.9	K12
201	杭	弥生時代畿内第II様式	3A 弥生時代中期初頭第2面		61.5	9.8	K12
202	杭	弥生時代畿内第II様式	2A 弥生時代中期初頭第2面	7.3	12.8	4.9	K9
203	杭	弥生時代畿内第II様式	2A 弥生時代中期初頭第2面	5.7	14.3	3.8	K9
204	杭	弥生時代畿内第II様式	3A 弥生時代中期初頭第2面	10.3	15.3	4.8	K13
205	杭	弥生時代畿内第II様式	1A 弥生時代中期初頭第2面	4.1	13.5	2.7	K36
206	杭	弥生時代畿内第II様式	1A 弥生時代中期初頭第2面	4.8	14.8	4.2	K36
207	杭	弥生時代畿内第II様式	1A 弥生時代中期初頭第2面	4.7	11.3	4.6	K33
208	杭	弥生時代畿内第II様式	2A 弥生時代中期初頭第2面	7	16	5.3	K6
209	杭	弥生時代畿内第II様式	1C 弥生時代中期初頭第2面	4.7	20.2	4.2	K62
210	杭	弥生時代畿内第II様式	1C 弥生時代中期初頭第2面		17.3	5.2	K55
211	杭	弥生時代畿内第II様式	1C 弥生時代中期初頭第2面		11.5	3.3	K55
212	杭	弥生時代畿内第II様式	5B 弥生時代中期初頭第2面		16.1	4.3	K114
213	杭	弥生時代畿内第II様式	5B 弥生時代中期初頭第2面		12.8	5	K114
214	杭	弥生時代畿内第II様式	弥生時代中期初頭第2面		11.3	6.7	K20
215	杭	弥生時代畿内第II様式	弥生時代中期初頭第2面	3	12	4.2	K20
216	杭	弥生時代畿内第II様式	2A 弥生時代中期初頭第2面	3.3	51.4	2.7	K4, 面取りあり
217	杭	弥生時代畿内第II様式	5A 弥生時代中期初頭第2面	6.5	14.8	3.1	K24
218	杭	弥生時代畿内第II様式	5A 弥生時代中期初頭第2面	6.7	14	4.8	K24
219	杭	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面	5.1	19.5	6.8	K139
220	杭	弥生時代畿内第II様式	弥生時代中期初頭第2面	9.5	18.8	6.3	K143
221	杭	弥生時代畿内第II様式	1C 弥生時代中期初頭第2面		29.1	4.7	K60
222	杭	弥生時代畿内第II様式	1A 弥生時代中期初頭第2面	4.8	16.6	3.3	K38
223	杭	弥生時代畿内第II様式	2A 弥生時代中期初頭第2面		18.6	5.3	K5
224	杭	弥生時代畿内第II様式	2A 弥生時代中期初頭第2面	4	13.1	4.3	K5
225	杭	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面	7.7	23.2	3.7	K138
226	杭	弥生時代畿内第II様式	4B 弥生時代中期初頭第2面	5.7	21	3.5	K138

備考欄の先頭にKを付した番号は杭もしくは柱の取り上げ番号。出土位置は図4.5の分布図参照。

第6章 まとめと課題

- ・宮ノ下遺跡第11次調査では標高0.3 ~ -0.15m付近を中心に発掘調査を実施し、多数の弥生時代中期初頭(畿内第II様式)の遺物、わずかに同時代中期中葉(畿内第III様式)、6世紀、7世紀後半、13世紀後半~14世紀前半、近世の遺物が出土した。また、弥生時代中期初頭に併行する遺構面を2面(弥生時代中期初頭第1面,同2面)確認した。
- ・標高0.3m付近のI,II層層界には地震動による変形構造の一種である火災構造がみられた。この変形構造はこれまでの周辺の調査でも確認できており、古墳時代中期~後期ごろの地震によるものと推定される。
- ・弥生時代中期初頭第1面に先行する同2面は、1面形成時の大規模な掘削により大部分が当時の機能面を失っていた。
- ・弥生時代中期初頭第1面では溝を掘削したときに産した残土によって盛土が施され、さらにその上面には高床建物が建っていたと推測される(MD1上面)。これは当時の地下水位の上昇にともなう湿気を回避するために作られた施設と考えられる。
- ・柱穴の堀形と柱の位置関係から判断して高床建物の柱は建物の荷重によって沈下していることがわかった。また、根絡み構造をもつ柱や柱穴の底に礎板がしかれているものがみられ、沈下を防ぐための工夫が施されていた。
- ・弥生時代中期初頭第2面では直立状態で埋没していた杭を無数に検出したが、用途についてはよくわからない。
- ・出土遺物のうち、畿内第II様式の土器のなかには紀伊系の甕が散見された。また、同時期に併行する木製品は杭や柱が大多数を占め、道具類はまれである。
- ・本書では弥生時代中期初頭第1面の埋没過程については詳しく言及していないが、現地調査ではこれに関するデータを記録しているので後日あらためて論じたい。また、すべての出土木材の切片を採取しているので、周辺の植生を復原するための材料にしたい。

報告書抄録

ふりがな きょうどうじゅうたくけんせつにともなうみやのしたいせきだいじゅういちじはっくちょうさ
ほうこくしょ

書名 共同住宅建設に伴う宮ノ下遺跡第11次発掘調査報告書

副書名

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 別所秀高

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 2002.08.31

作成法人ID 42170

郵便番号 577-0843

電話番号 06-6736-0346

住所 東大阪市荒川3-28-21

ふりがな みやのしたいせき

遺跡名 宮ノ下遺跡

ふりがな ひがしおおさかしちょうどういっちょうめななじゅうよんのいちほかじゅういちひつ

遺跡所在地 東大阪市長堂1丁目74-1他11筆

市町村コード 27227

遺跡番号 125

北緯 343957.1 (JGD2000/GRS84)

東経 13513346.4 (JGD2000/GRS84)

調査期間 1999.11.01-2000.01.17

調査面積 600

調査原因 共同住宅建設工事

種別 集落跡

主な時代 弥生

遺跡概要 弥生中期初頭 - 柱穴 + 溝 + 土壙 - 弥生土器 + 打製石器 + 磨製石器 + 木製品 / 弥生中期中葉 - 弥生土器 / 古代 - 土器 / 中世 - 瓦器 / 近世 - 陶器

特記事項 弥生中期初頭の柱の中に建物の沈下を防ぐための根絡み構造をもつものがみられた。

共同住宅建設に伴う
宮ノ下遺跡第 11 次発掘調査概要報告書

発行年月日 2002 年 8 月 31 日
発 行 財団法人東大阪市文化財協会
〒 577-0843 東大阪市荒川 3 丁目 28-21
印 刷 株式会社 近畿印刷センター
〒 580-0001 柏原市本郷 5 丁目 6-25
